明治二十六年十月五日發行

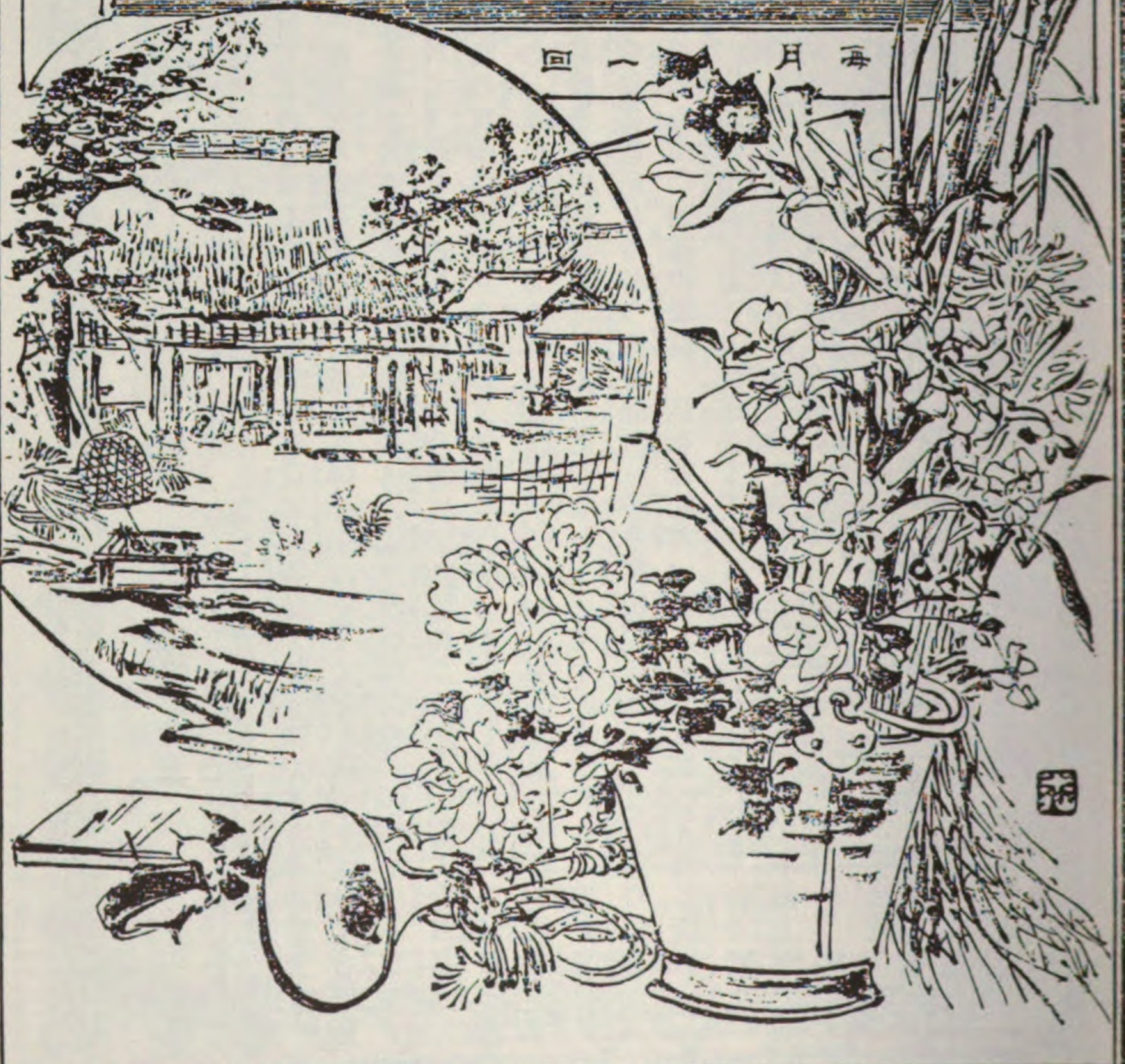
THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

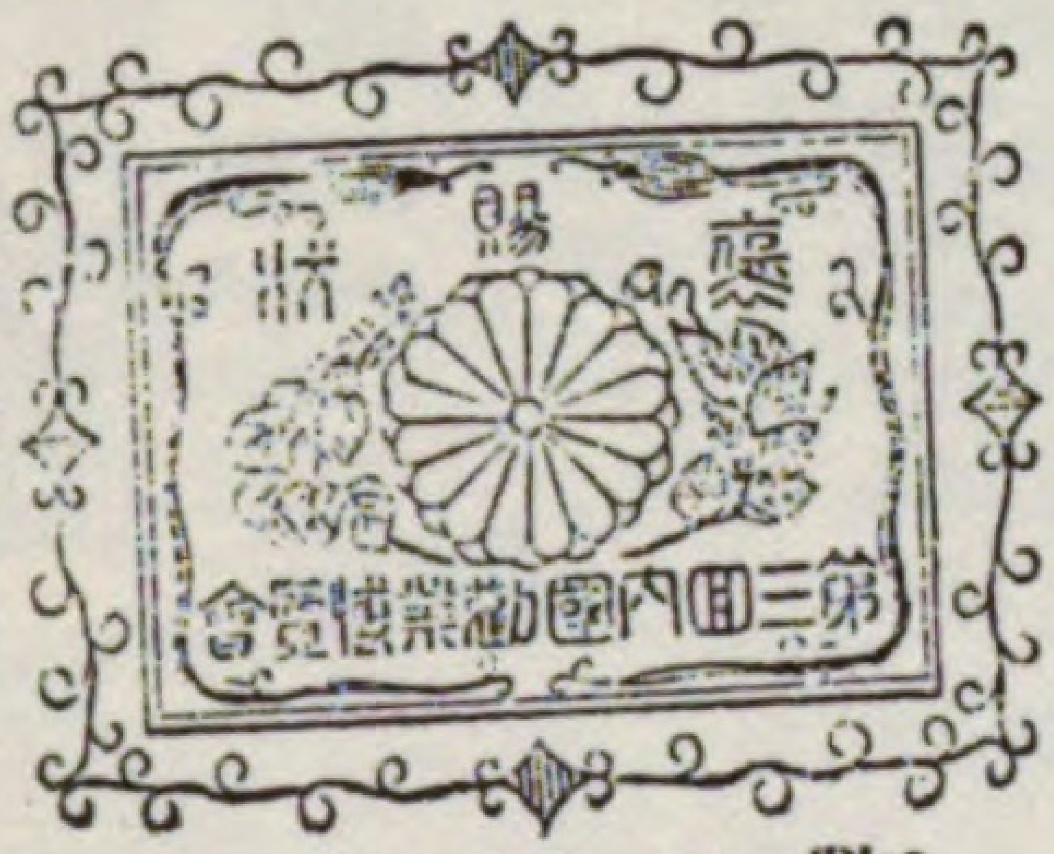
東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

毎月一回



第拾號





弊舖特製 **福神漬御披露**

弊店にて發賣の福神漬は衛生に適し經濟に宜しく此香の物を常に用ゐ給ふ時は肺臓を損するの患なく富貴自ら來るを以て福神漬とは名けたり其品の善良なる其味の佳美なる春夏秋冬の氣候にも變化するとなく年を經ても腐敗する恐なし且是を椀或は茶碗に入れて沸騰せる白湯を注げば即席の吸物となる其香味最も雅にして妙なり殊に諸彥の旅行或は疾病等にて食忌み給ふ際は是に勝れる飲食の良菜はあらざるべし又滋養の効著しきを以て平常の御茶請などには至極の品なれば下戸も上戸も膳部中欠くべからざる良品なり是を以て發賣以來内外諸彥の賞賛を得て日に月に繁忙を極め深く感謝の至りに堪ず就ては諸彥の愛顧に背かざるやう此際品物を撰み御需用に應候へば倍舊の愛顧を給ん事を奉希上候◎海苔の佃煮、昆布の佃煮、別て御評判に預りたる新製の利久味噌、蛤の甘露煮、をも御購求なりて御賞美の程を乞ふ◎近來所々に贋物の福神漬を販賣致居候間何卒發賣特と御認の上御購求之程偏に奉希上候◎市内は端書にて御注文あれば早速持參仕り其際端書代返上可仕候

東京市日本橋區通三丁目東側角
池之端仲町 酒悦同家

初祖製造元 酒悦商慶 敬白

◎賣捌所ハ各地至ル所ニアル最寄店ニ御求メヲ乞フ

家庭教育に於ける新刊書

- 小中村義象・多田小野兩君書　女子書翰文　附歌の書式　完　實價金二十錢　郵稅四錢
- 有住齋著　女禮式と婚禮法　完　實價金十六錢　郵稅四錢
- 小中村義象著　國史學　完　實價金二十五錢　郵稅四錢
- 服部元彥著　國文學　完　實價金二十錢　郵稅四錢
- 佐藤雲韶述　漢文學　完　實價金八錢　郵稅二錢
- 醫學士近藤常次郎　育兒訓　完　實價金十三錢　郵稅四錢
- 東京音樂學校教授上眞行著　唱歌教授法　完　實價金十二錢　郵稅四錢
- 皇后陛下の御聖德　落合直文謹述　完　實價金十五錢　郵稅四錢
- 本邦書道大意　關根正直述
- 大和田建樹　大和田建樹　作文法・歌學　完　實價金十五錢　郵稅四錢
- 服部元彥編・雅俗俗雅　日本小辭典　完　實價金三十四錢　郵稅六錢
- 醫學博士森林太郎著　衛生學　完　實價金十錢　郵稅二錢

發行所　東京市神田區仲猿樂町十五番地國語傳習所內　女學通信會

寫眞石版　名家眞蹟　書畫

第十六輯

六月十五日發行○改良美製一冊金五十三錢郵稅四錢

◉所載人名

◉菅公書阿彌陀經◉日本最古文字◉御陽成天皇宸翰◉德川秀忠書◉黑田孝高書◉中江藤樹書◉朝野魚養書◉清汪揖書○元信ノ花鳥○常信ノ源氏物語○明祭道憲書○抱一ノ三幅對○光琳ノ風神雷神○眞笑ノ西湖十景○宗淵ノ山水○祐勢ノ三笑○等薩ノ達摩○石操ノ鳥

[illegible]

第二輯出版會員募集

右會員ニ一帖金三十五錢郵稅四錢ハ世ニ稀ナル法帖ヲ寫眞石版トナシタル者ナリ試ニ一覽ヲ乞フ所載眞蹟入名

◉王羲之◉王徽之◉王衍◉王獻之◉王凝之◉王薈◉王珣◉王敦◉王恬

◉右之外宮版書畫類本會出版ノ古代百名家書畫色紙短冊○同ク近世ノ分○菅公道風ノ大字○本朝能書三筆大字○其他古代ノ寫眞物數種アリ明細書御入用ナレバ郵券二錢送ラル可シ

東京日本橋區大傳馬町二丁目十六番地　古書畫出版協會

平民叢書第四卷

教育と遺傳

印刷中

本月下旬發賣　定價十二錢　郵稅二錢

目次○緒論●第一章、道德本能と教育、(一)生理的誘告、(二)心理的誘告、(三)德育と誘告●第二章、道德本能の發起、(一)道德力——意志、(二)道德の目的——義務、(三)道德的疾病、(四)道德本能の發達に於ける教育と遺傳●第三章、躰育、(一)躰育の必要、(二)腦の過歷、(三)手藝の練習●第四章、智育、(一)智育の地位及目的、(二)智育の方法●第五章、學校教育、(一)專一的智育の危險、(二)倫理學の教授、(三)道德的訓練、(四)市民教育、(五)審美的教育、(六)科學的教育、(七)競爭試驗の利害●第六章、女子教育と遺傳●第七章、作物轉換と教育●第八章、教育の極致、無限の進化

教育は古今の一大問題也、之を小にしては個人の禍福に關し、之を大にしては國家の安危に關す、教育と遺傳とは現今社會の一大問題也、之を生理的に考へ、之れを心理的に究め、以て教育論中、一大鉄案を下すもの、即ち本書『教育と遺傳』に及くはなし、世の青年子女を薫陶する當局者は勿論、之が父兄姉妹たるもの、必ず一讀すべきなり、

平民叢書第三卷

國家と政府

再版

美本小冊子、百五十五頁、定價十二錢、郵稅二錢

目次○緒論●第一編、國家◎第一章、國家の概念○第二章、國家の權力○第三章、國家の目的○第四章、國家の起原○第五章、國躰の種類●第二編、國家の發達◎第一章、英國憲法制定史○第二章、米國憲法制定史○第三章、獨逸憲法制定史○第四章、佛國憲法制定史○第五章、平民的國家●第三編、政府◎第一章、政躰の種類○第二章、英米佛獨の政躰●結論

歡迎、又歡迎、又又歡迎、平民叢書の天下に歡迎せらるゝこと斯の如く多し、遂に第一卷、第二卷を再版したる此の叢書は、今や其の**第三卷**を**再版**せり、速に把つて繙閲せよ、後るゝは悔ゆる所以なり、

發兌元　東京々橋區日吉町四番地　**民友社**

家庭雜誌定價表

	前金	郵税地方共
一冊	五錢	五錢五厘
六冊	三拾錢	三拾三錢
十二冊	金五拾錢	五拾六錢

廣告料 二十四字詰行數一回八錢　數に付割引無し

本社は前金にあらざれば發送せず爲替は芝口郵便局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割增しの事

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十六年六月十五日發行

家庭雜誌第拾號

目錄



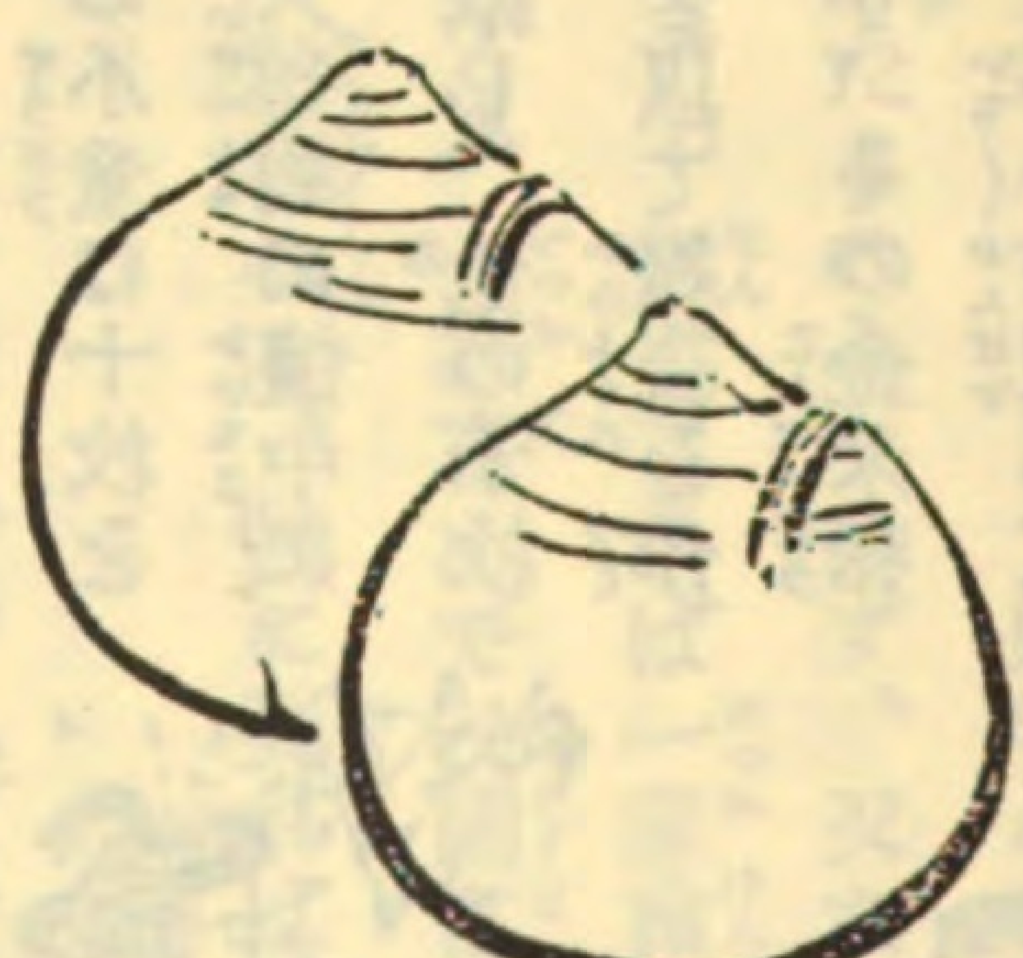
社說

家庭敎育　貯蓄心を養ふ可き事

『塵も積れば山となる』とは、人生萬般の眞理を穿ちたる金言ぞかし。千馬萬軍を指揮する大將も、始より大將たるにあらず。天地の知識を一人にて集めたる學者も、始めより學者にあらず。世界の富を一家に有するロスチイルド、ウワンダルヒルドとても、始めより富者にあらず。皆な塵も積りて山となる眞理の的例なりと知らずや。社會は累積なり、人生も亦た累積なり。」

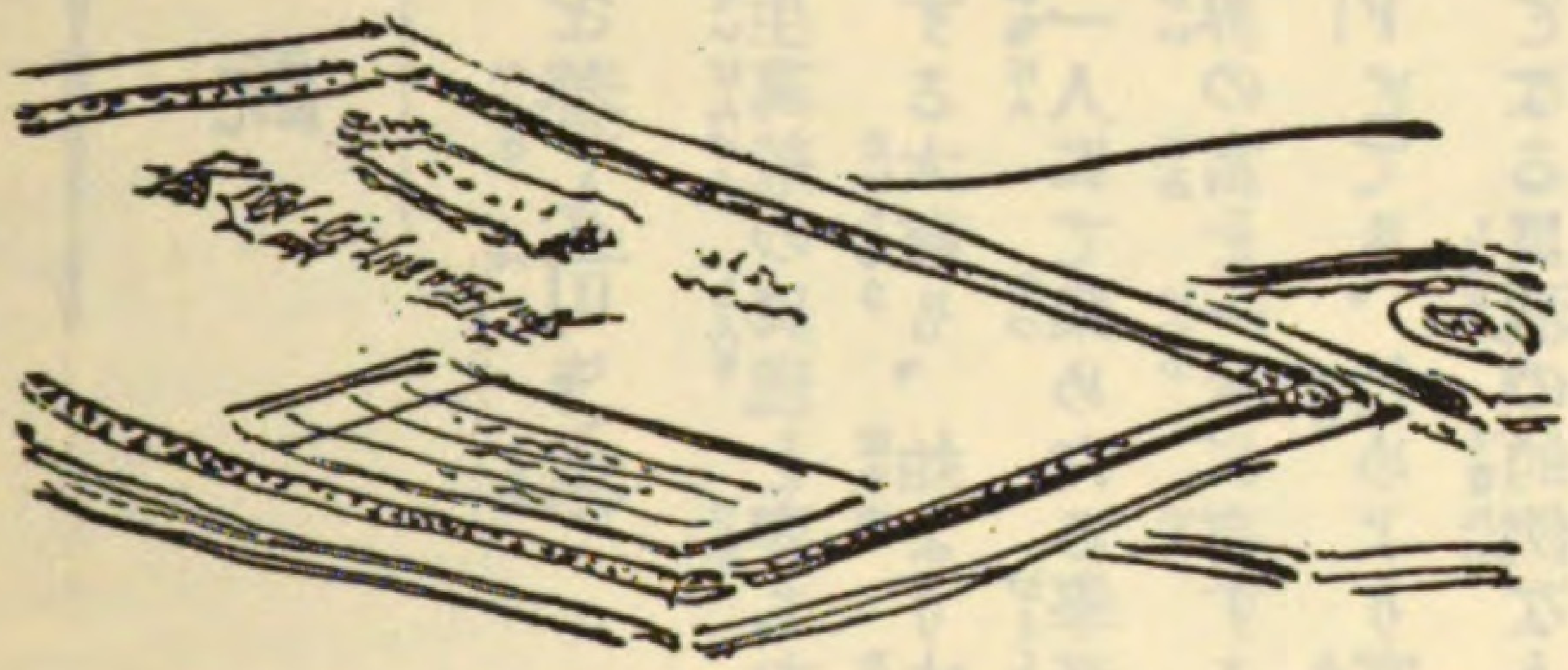
却說此の眞理を、事實に於て明らかにするは、貯蓄より先なるはなし。一厘も十個加れば、一錢となり。一錢も十個加れば、十錢となり。十錢も十個加ふれば一圓となり、一圓も十個加れば、十圓となり。十圓も十個加れば、百圓となり。百圓を十個加れば千圓となり。千圓を十個加れば一萬圓となる。一厘より積んで一萬圓となる、塵積んで山となる、眞理豈に我を欺かんや。

されば家庭敎育に於ては、須らく先づその兒童小女に貯蓄心を養はしむるとを務めざる可らず。



貯蓄心を養はしむるの手段は貯金せしむるより先なるはなし。その方法たるや、兒女相應の仕事をなさしめ、その報酬として少しつゝの金錢を與へ、之を貯蓄せしむるも可なり。又た學科に勉强したる賞與として與るも可なり、或は誕生日、或は祭禮、或は節句、或は旅

行等、それ〲兒女に金錢を與ふる機會は澤山あるなり。今その貯蓄したるものを以て、或る場合に於ては、彼等の必要品を買ひ與へなば、彼等も事實に於て塵積れば、山となるの的例を見、一層貯蓄心を發揮す可し。その手段は一に父母兄姉たるもの、手加減如何にある也。」



吾人之を聞く、井上伯夫人、嘗て獨逸公使の家族と相伴ひ函根より東京に歸らんとし、途上小田原に憩ふ。井上伯夫人、金米糖を掬して之を獨逸公使の子息に與ふ。彼れ十二三の小童なり、之を受けて直ちにその從者を呼び、その懷中より十錢銀貨を出し、半紙十枚を買ひ來らしむ。從者二十枚を買ひ來る、公使の子息不興氣げに曰く、十枚と云ひしに、何故に二十枚を買ひ來りしぞと、從者具さに二十枚即ち一帖にして一帖より少くは紙屋にて賣らざる旨を詫ぶ。茲に於て彼の小童は十枚を大切相に懷中に藏し、他の十枚を以て紙袋を作り、その金米糖を一々分配して之れに收めて曰く、今日東京に歸るの土産となさんと、乃ちその父母姉妹より婢姆の類に到る迄、悉くその名を署し、用意總て整へり。井上伯夫人、之を傍観し、餘りに賢こけなる



を見て、之に問ふて曰く、御身は如何にして金錢を所持し給ふ乎と。小童曰く父上より毎月學科勉强の賞與として、十錢づゝ與へ給へり、余之を貯蓄し置けりと。茲に於て井上伯夫人も嗟嘆したりと云ふ。

吾人嘗て獨逸國民か節儉勤勉の國民たるとを聞けり、今に於て其の養ふ所のもの深くして且つ遠きを見る。」

貧は人生の重荷なり。貧乏は動もすれば、卑屈の母となり、破廉恥の母となり、罪惡の母となる。人間不幸の十中の六七は、貧乏より來ると多し。故に人若し子孫の計をなさんと欲せば、子孫をして貧乏せしめざる用意あるを要す。財寶を山の如く積んで之を子孫に遺すも、子孫にして貯蓄心なくんば、子孫にして金錢を瓦礫の如く揮ひ尽さば、子孫は乍ち赤貧の者とならん。現に社會に於て最も憐む可きは、富家の子の貧卑に墮落したるものにあらずや。されば子孫をして貧乏せしめざる所以は、子孫をして貯蓄心を養はしむるに在るや固より疑を容れず。既に子孫の心中に、節用、貯蓄の念を刻み置かは、縱令遺財多からざるも、彼等の品格を維持する丈の生活は、如何なる場合に於ても、做し遂け得可きに相違なしと知らずや。

兒童小女をして貯蓄心を養はしむるは、一家永遠の長計たるのみならず、又た一國永遠の長計と云はざる可らず。何となれば一家儉約にして一國儉約ならざるはなく、一家富んで一國富まざるものあらず、一家兒女の貯蓄心も、茲に到れば國家富强の長計と云ふ可き也。

且つ貯蓄心を養ふは、單に金錢を貯蓄するに止らず、亦た國民の性情を養ふ所以也。貯蓄は人に明日の希望を與ふ。貯蓄は人に今日の克己を與ふ。貯蓄は人に昨日の快樂を與ふ。貯蓄は人をして勤勉ならしめ、貯蓄は人をして正經ならしめ、貯蓄は人をして誠實ならしめ、貯蓄は人をして僥倖、怠惰、放逸の罪過より遠さ

からしむ。貯蓄心は即ち恒心なり、恒心は即ち人の品行の土臺となる也。西哲曰くその財嚢の底を握りて放たざる人民は眞心ある人民也と。吾人は實に其の至言たるを信す。

要するに貯蓄心は、人をして塵積んで山となる眞理を會得し、且つ實行せしむ。蓋し此の眞理たるや一家經濟の上のみならず、一身生活の上のみならず、人生總ての問題に應用す可きものたるを知らば。貯蓄心を養ふは、人の性情を養ふ所以の理、亦た多言を俟たずして明かならん。人生の進歩は累積の功に在り、政治家となり、實業家となり、學者となり、大將となり、英雄となり、人物となる皆な累積の功に據る。而して貯蓄心は實に累積の必要を敎へ且つその必要を行はしむ。是れ則ち德に進むの入門と云ふも不可なき也。



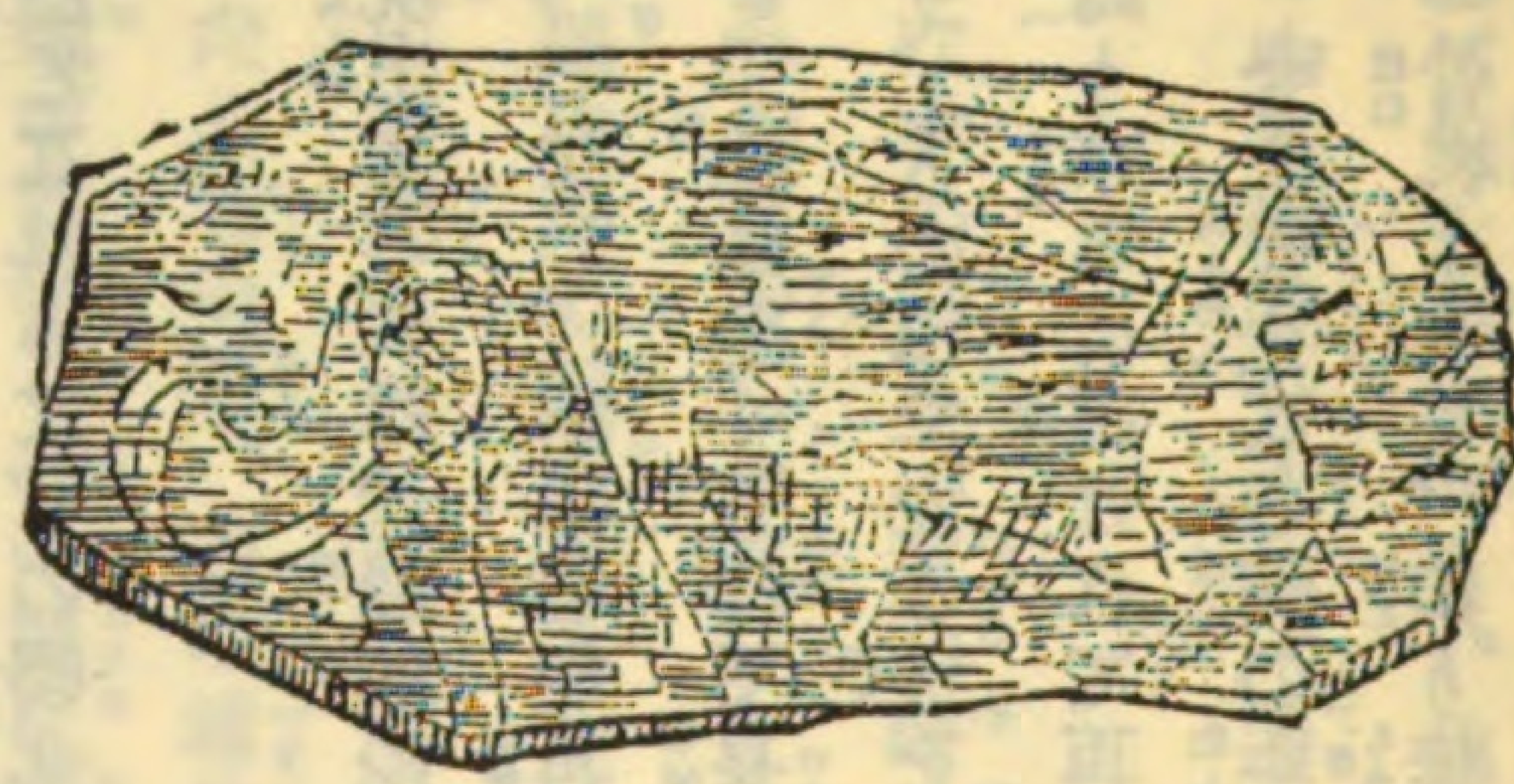
科學

科學者の昔の夢（つゞき）

此時科學者の思は佛蘭西國の南西の方、或る川の岸に多くの洞集まりて野蠻人の家を成せる地方に彷徨へり。彼は此の處にて多くの新奇なるものを見たり。人は鹿の角や、木に石を着けて作りたる矢を携さへ、冬の日の食を求めんとて地上に近く飛び交ふ鳥を射り、河の傍りに立てるものは同しく鹿の角にて造り、筋を以て製せられたる細を結び付けたる小き鎗を携さへ、時々現はれ出づる大なる魚を刺して岸に引き上げ居れり。

此等の野蠻なる人民の中にあつて最も奇怪なるは、洞の口に盛んに燃ゆる火の傍らに坐し、珍らしげに見守る小兒に取り繞かれ、尖りたる石を以て馴鹿の角を削

り居る人なりき。彼は何事をなし居るなる乎。漸々、角の上に何等かの摸様現はれ來り、此の彫刻師が其の手を止めし時には二頭の馴鹿の角を交へて鬪ふ様ありありと見られける。次て彼は未たマムモスと名づくる大象の牙の一片を取り、甚だ徐ろに、最も注意して其の彫刻を始めたり、最より面白さうに見守り居たる小兒の群は遂に見るに倦きて、打ちつれて火の後に行きて遊び戯れぬ。


古代の人の刻みたるマムモスの圖

科學者は此の彫刻師の肩の上よりのぞき込み、マムモスの像の象牙の上に刻まれたるを見たり、其の彫刻の跡の粗雑なる、彫刻と云はんよりも、寧ろ爪にて傷づけたる如きものなれど、毛の下がれる皮、長き鼻柱、上に屈りたる牙などによつて、科學者は明らかにこれこそ古代に住みて今は全く其の跡を絶ちたる大象なるべしと認めたり。『アー、』と科學者は聲高く叫び出だしたり、『これこそドルドーン(佛蘭西の南西)のラ、マデレーンの洞に殘れる象牙の彫刻にて、人が、昔の昔、其の種を滅したるマムモス即ち有毛の象が、尚ほ生存したる時代より既に地上に存在し、圖を畫く術を知れる程に進歩し居たる事を證するものなれ。』

夢の中に叫びたる此の言、耳に入りて科學者は突然夢より覺めぬ、科學者は夢覺めて、其の夢の中にて、昔の昔の日に生存したる人類のことを見たることを知れり。此等の人類の生存せし時代は知るを得べからず、十年、百年、千年、萬年を以て算するとも及ぶべからず、只だ明らかなるは此等の人種ありて後、有毛の大象、サーベルの如き齒を有する虎、洞に住む熊及び山猫、

毛皮を被れる犀、麝香羊、其他多くの動物が全く死滅して種を絶ち、河馬、獅の如きもの總て阿弗利加其他の熱帶地方に逃れ去り、島にあらざりし國、島となり、陸にあらざりし海、陸となれるなどの變化ありたることのみ。

此等の變遷の地上に現出するには、幾何の長日月を要せし乎、知るもの絶へてなし。科學者が再たび其の夢の境に漂ひ入りしとき、地は全く荒れて長き間住む人なかりし如く見へたり、人の出でたる後を窺ひ洞に入り住所を求め、其の歸り來るに追はれて再たび林野に彷徨せし山猫の類は、今ま安全なる洞の主となり、洞に床に散亂する動物の骨によりて、獨り猛威を擅にすることを示せり。洞の中に彼の粗惡なる石器の落ち散れる影もなきを見れば、人類が此の洞の住家を捨てゝより既に長き年月を經たるなるべし。されど須臾にして山猫の時代も亦た過ぎ去り、洞は長く住むものもなく捨てられ、上より滴り落つる水の中に含める白堊は床の上に沈澱して、一層また一層、數百年の星霜を經て數尺また數尺の厚さを加へ、深く過去の秘密を鎖したり。

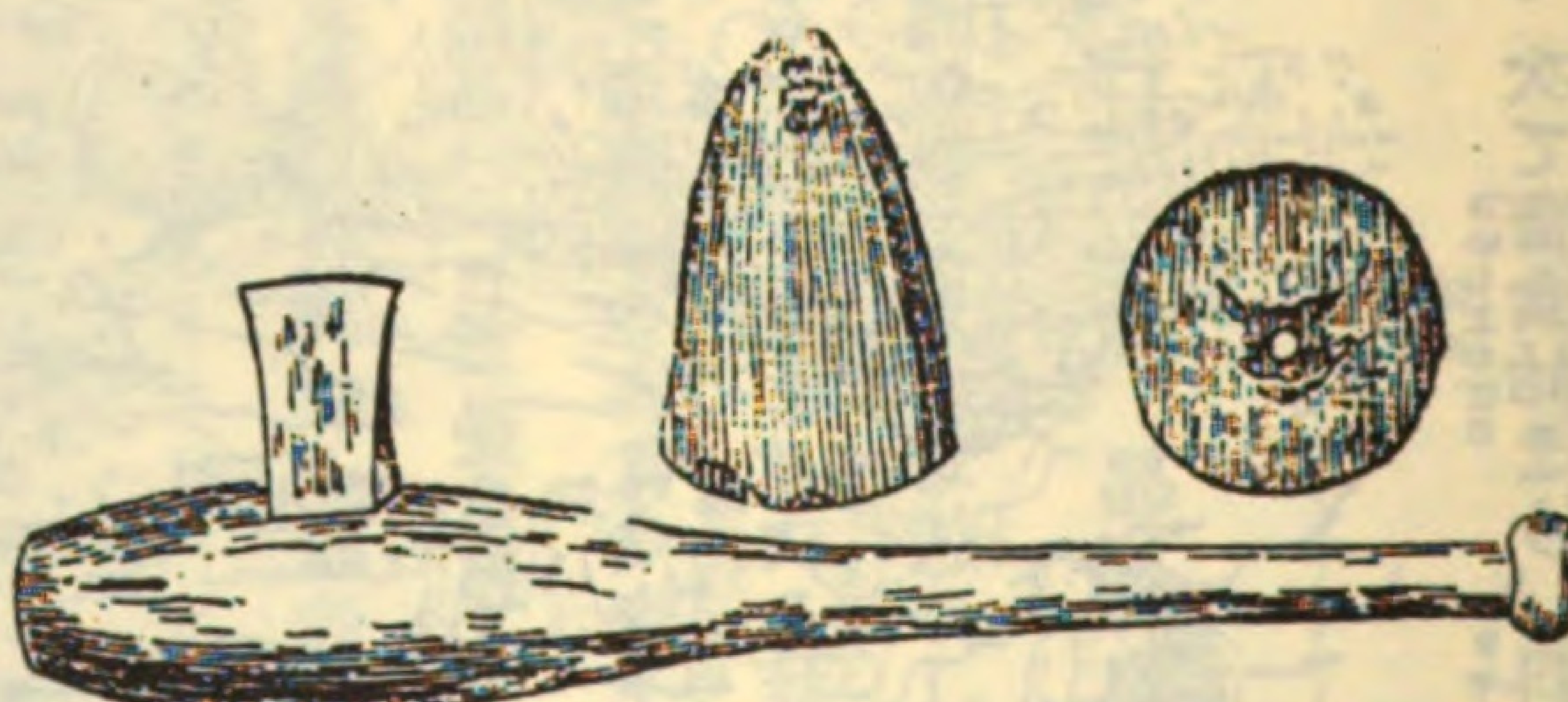
＊＊＊＊＊＊＊＊

陸の表面は今や全く其の光景を一變せり。氷河は既に解けて跡なく、多くの奇怪なる動物も亦既に其の影を滅して見るべからず、山野の間には尙ほ馴鹿、野牛の彷徨するあり、獰猛なる相を示して餌を求むる狼、熊の群あり、流れを塞ひて堤を築く海狸あれども、象、河馬、獅子、虎の群は既に去つて再たび歸り來らず、前の如く人の住める洞穴、或は新たに作りたる地下の小屋の傍らには羊、野羊の立ち或は臥すあり、犬は其の間にあつて群を見守れり。地は前の如く、一躰に黒き森を以て蔽はれたれども、彼處此處に伐り開かれたる一小地あり、穀草、麻の類生ひ茂れり、小兒は前の

如く赤裸にて遊ひ戯るゝあり、或は粘土を弄んで、洞或は小屋の前に燃ゆる火に掛けられたる如き土器を作らんとするに似たり。婦人の或るものは、半は獸皮を着け、半は粗き毛布を纏ひ、小さき圓き石の中央に穴を穿ちたるを錘として麻を糸に撚り、他のものは大なる石に穿ちたる穴の中に穀物を入れ、適宜の石を以て之を磨したり。

人は野獵を以て職業となすの傍ら、羊、野羊の群を牧し、種を蒔き實を獲るか爲め少しの時を費せり。總ての器械は往時の石の武器の如く粗造なるものにあらさりしかど、尚ほ總て石にて造られたるものゝみなりき、鹿の角の柄を付けたる石の斧、石の鎗先、鋭く磨きたる石の鏃、鉋、石抛げ器等、森の間に散點する廣き湖水には火を以て木の材を焼き凹まして造りたる獨木舟を浮へ、一人は之を漕き、一人は釣を垂れて坐せり、湖水の濱には石の錘を付けたる網を曳けり。

人は既に遊獵のみを事とする時代より進歩して、此の新石器時代に於ては、農夫、牧夫、漁夫の業の幾部分をも知れり。彼等は恐らくはまた交易の道の端緒をも知りたるならん。彼等はまた敵に對して自ら守らんが爲め、隣人を作ることを知りたると見へ、其の家を造るに、地を穿つこと數尺、粘土を以て相密着せしめたる木を以て其の上を葺き合せ、長き道を穿つて其の隣家と往來し、小高き岡には土を積んで壁を作り、溝を以て之を繞らし、他の種族の襲ひ來りたるとき、婦人小兒をして難を此處に避けし



一、石斧
二、兵器
三、石錘

むる準備をも整へたり。

されど彼等は尙ほ、出來得る丈は安逸の時を貪れり、古代の獵夫が殘し置ける洞のあるあれば、彼等は新たに己れの方法を用ひて家を作らすして、直ちに此の洞穴を用ひて其の住居となし、古代の遺物を封鎖せる白堊の床の上に息ひ且つ眠れり。

科學者か此の新しき人種の武器を磨くを見、牛馬を飼ふを見、野獸を獵るを見終りし時、遙か彼方の野に行列をなして進み行くものあるを見たり。此の行列の中よりは泣き叫ぶ聲も聞かれぬ。行列の最先に進みたる三四人のものは木の枝を編みて作りたる一の簀を肩にし、其の上に一の酋長の死躰橫はれり。行列の進み行くを見たる男は其の手に有てる武器を拋げ棄て、女は其の紡績錘を拋げ棄て、走つて列に加はれり。行列は進みて、三片の石を組み立てゝ口を作りたる穴のある處まで達しぬ。簀を擔げるものは炬火を點して穴の中に入り、豫ねて設けたる場所に死躰を坐せしめ、其の傍らに石の鎗、斧、貝殼の頸輪、食器を備へて出で



葬式

來れり。次て齋食始まり、叫聲、哭聲の中に烟立ち昇り、犧牲を屠り、肉を煮、其の一部を取つて死したる酋長の靈に備へんとて傍に置き、土を積みて穴の口

を塞ぎ、群集は思ひ〳〵に散じ行きぬ。

科學者の夢は益々佳境に入り、人は洞穴を棄て、地を擇んで、木及び石を集めて家を作り、智識の進むに從つて金屬を鑄つて、銅の小刀、斧、劒、鎗を造り始め、鷄を飼ひ、牛馬を用ひ、機を織り、布を作り、衣を裁することとすらなし始めたり。彼等の爲す所ろ愈々多くして、科學者の夢益々忙がはしくなりぬ。

大鼓の音、鬨の聲彼方より響き來り、此方より反響するを聞たる科學者は手を拍つて喜び、制する能はずして再たび叫び出だせり、『必定面白き實際の歷史は此より始まるべし』と。

* * * * * * * * * *

夢に聞きし大鼓の聲は課業の時間來りしを報ずる號鈴にて、鬨の聲は教場に集まり來る騷がしき小兒の足音なりける。小兒等は科學者が夢の中にて親しく數千年の變遷を目擊したることを知らず、只た其の講義の小說の如く、パノラマの如く面白きに目を見張り、耳を開き、口までも開きて驚けるのみ。（おはり）

史談

日耳曼皇后

才氣歐洲の婦人社會に敵なしと稱せられ流石の老ビスマアクさへ持てあましたる姑氏、始終忙はしげに走せまわりて歐洲一の有爲の帝王と其名も高き良人の華々しきに引易へ、日耳曼皇后アウグスタ、ヴイクトリアの名は日耳曼以外に知らぬ者多し。

アウグスタ、ヴイクトリアの履歷は極々簡單なるもの也。シユレスウイグホルスタイン公の女にして、十二年前當時猶皇太孫たりし今の維廉二世に嫁し、六年前皇后の位に上り、當年三十五歳にして良人に長ずる三月、子女七人を擧げ、今猶壯健にして日耳曼皇后の

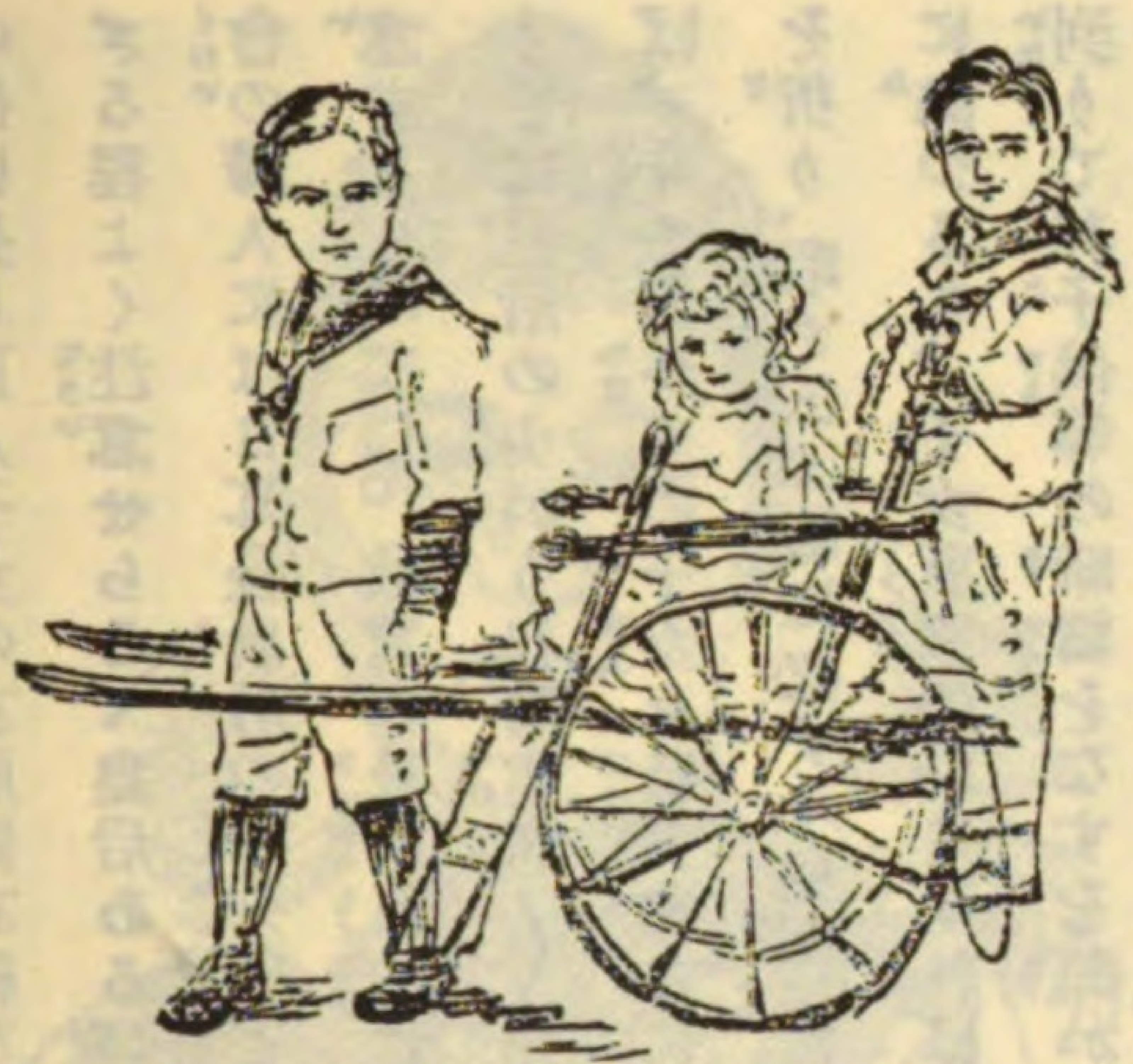
位に坐せらる。何の小説的奇談もなき也。皇后は美人なりやと云ふに、極平常の婦人なり――尤も其容貌は快活にして擧動やさしく、涼しき聲と温和なる碧りの眼と明色の髮と美はしき口と肥胖の體格を有せらるれ共。皇后は雄才男子を凌ぐ婦人なりやと云ふに、極普通の婦人なり、尤も其頭は明瞭にしてまた自恃の氣象あり力と愛とよく相並びたる性質を有せらるゝも。然らば皇后何の取る可き所あるか。曰く、眼を眩せずして美はしき花あり、音無ふして光る星あり、華々しからずして貞き婦人あり。アウグスタ、ヴイクトリアの好所は其光を韜み香を藏む所にあり。皇后は婦人らしき婦人なり、家の人なり、小兒の母なり。傳へ云ふ、ビスマアク今の皇太后の雄才剛毅常に先帝を動かして政事に干渉せられしに懲り、特に温和靜穩の婦人を今帝の配に擇みしなりと。其は兎に角に、性急躁忙安息を知らざる今帝の傍らに、此温和靜穩の人の立るゝは日耳曼の幸福と云可し。



アウグスタ、ヴイクトリアは高き門地に生れたるも、極々質素嚴肅の敎育を受け、普通課程の外、百姓の女の如く節儉家政を習はれたり。左れば歐洲一等國の寶位に坐するの今日と雖も、冬も夏も、伯林に在るも、他所に在るも、朝は必らず五時に起き、必らず六時に朝餐を喫し、一時に午餐を喫し、五時に茶を喫し、八時に晩餐を喫し、十時過ぐれば一家皆夢の中にあり。「早起早臥は健康の原富の原智慧の原」との古諺を、皇后は深

く〱信せらるゝなり。皇后は時間を重んずると甚しく、他の結婚祝誕生祝などに物を贈る時は常に時計を送らる。日耳曼帝は歐洲諸帝王中尤も服裝のよく整ひたる君なりとは一般の評判なるが、是れ全く家に針線の技に長じ良人子女の衣服襯衣韈など尋常家妻の及ばざる程よく注意せらるゝ皇后あるが爲也。歐洲流行社會の婦人には日耳曼皇后の半分ほども其子女の事に注意するものなし。敎育の最高目的は人物を造くるにありとは皇后の少かりし時常に〱聞き居られし所なれば、今や其多くの子女を敎育するにも一ト方ならず骨を折り、暇と云ふ暇は必ず小兒部屋にあり。假令賓客堂に滿つるも、子女就寢の時となれば、必ず臥床の邊に到りて其子供等の祈禱をなすを聞かるゝなり。夏の頃空靑々と晴れて日光滿地鳥聲樹間に喧しき折、ポストダムの公園に英國風の質素なる黑服着たる風姿優美容貌快活の一婦人の、二歳より十歳までの小童六人に取まかれて散歩するさまを見ば、誰か其日耳曼皇后たり皇子皇女たるを知るものあらん。童兒等は蝶々を追ひ、小舟を駛せ、池に漁り、小馬を走らせ、快活なる幼なき聲々母君の笑聲と相話して園中に響く。日耳曼廣しと雖も、斯く愉快なる仲好き家族は稀に見る所なり。五月となれば皇家大率伯林を去て此ポストダムに赴くを常とし、皇子等各々此處に小園を有し、小園丁となりて保管せらる。當年十歳の皇太子曾て老園丁と共に日々風に吹き落さるゝ椰子を拾ひ集め、之を老園丁に賣りて金を積み、拾いては賣り賣りては貯へ、斯くして父王の誕生日に進物を買ひて進ぜられしことあり。節儉勞力の事を深く其子供に知らしめむと骨折らるゝ母后の感化を見る可し。六七月には大抵あまり人の寄り集はぬ海邊に行きて、靜素の生活をなし、皇后は只ラヴェンスベルグ伯爵夫人と名乘り、日々英國風の靑き水夫の服を着たる其子女と海邊の砂上に出

で、少女少童は砂に穴を掘り驢馬を馳せ小舟の間をぬけくぐり貝を拾ひ海藻を集むれば、母后は靜かに砂上の椅子に倚りて或は讀み或は編物をなす。皇后また寫



眞をとるに巧みにして、曾て倫敦新聞の畫工が潜かに皇后の砂上に子女と相戯れらるゝの風を描かむとなし居りしを、目早く見とめ寫眞鏡を彼畫工に押し向けて大に畫工を弱らされしことあり。

維廉二世曾て云へることあり、余は日耳曼の女子が皆皇后の例に倣ひて三大K即ちカルシ（教會）カインデル（兒女）クエシ（家政廚房の事）を發育する樣に務めんことを望む」と。日耳曼にては婦人の最高德は善良なる家妻たるにありとなすことにて、日耳曼の皇后其人は固に此方に於て摸範たる可き人なり。皇后は其父の家にて學び得し質素平易の風を王宮の中に移し植ゑられたり。皇后あまり外に出でゝ儀式などに列するを好まれず。但流石武を以て立つ習ひの國とて、此の質朴平易の皇后も軍隊撿閲演習等に列するを好み、制服を着て皇帝と馬を聯べて轡を按じ徐行せらるゝ時は誠に見もの也。皇后少きより騎馬を好んで之に長ぜらる。左ればキユイラシエル隊の名譽大佐の美々しき軍服を着て、昂然馬上に顧眄せらるゝ時は、三日三夜馬を下ずして矢石の間に走せまはりし英國のマアガレット后の昔もしのばれてゆかし。

公衆慈善の事は皇后のまた尤も注意せらるゝ所也。伯林中の慈善事業は一として皇后の知られざるなく、就中小兒のためにするものは其尤も注意せらるゝ所、濟

都の貧兒は母の如く皇后を愛敬す。過る日も小兒病院を見舞はれしに、極めて幼き子供病床より起き上りて皇后の衣を牽きければ、皇后は其ほとりにありし繪本を取り上げ、其病兒の側に腰うちかけて共に繪本を開き見て之を慰められしと云ふ。また曾て或る女學校に行啓ありしに、一少女全級總代として一個の花束を献じ並に一篇の頌詩を吟ずることゝなりしが、如何にしけむ少女は其震ふ手に持ちたる花束を捧げしまゝにて滿面紅を潮しつゝ詩の一句も吟じ得ざりければ、皇后は眼利く之を見て其少女のほとりに寄り接吻して云はるゝ樣「御身は其美はしき花束を贈らむとするにや、サラバ詩は此方より御身に贈る可し」と。皇子の誕生ある時は、同日に生れし日耳曼中の小兒に皇后の手許より下賜金あり。此頃日耳曼中のありとあらゆる人民より各々吾子の名親となり玉はんことを皇后に願ひ出づるもの其數を知らず、あまり多くして十分一も應諾せらるゝこと叶ひ難ければ、其子の父か母か皇后の知り玉ふ者丈其願に應ずることゝせられたり。ナポレオン曾て曰く、「吾は國を獲、ジョセフインは人心を得」と。日耳曼皇后の如きは人望に心なうして人望を得らるゝなり。

皇子皇女の其母君を愛敬せらるゝこと比類なし。皇太子の師傅曾て人間は皆罪人なりと云ふ事を太子に說き聞かすに、太子容易に信ぜられず、押し返へしてエライ人達も矢張り罪人なりやと問はる。師傅答へて曰く、今申したる通り人間は誰れも皆罪人にこそ候へ」と。懷疑的の太子は更に言つて曰く、父君は或は然らん、母上は決して然ることあらじ」と。皇帝の外に赴かるゝ時は、毎日皇后に書狀若くは電信を送らざるなく、時には一日に二回も三回も書狀を送らるゝことあり。皇后の快活なる氣性は實に一家の光也。左る大演習の後、一夕維廉帝はグルエックスブルグ(皇后の生地)の宴會

に於て演説して曰く、
余を他處にまさりて此地に親く繋ぐものは、余が側に光を放つの寶珠——即ち皇后陛下也。此地に生れ日耳曼皇女の美德を兼ね具へたるは彼女也。余が吾位置の重大なる責任をも喜んで負荷し得るは、皆彼女の力によりて也。

望夫臺

蔽日生

夜更け人散ず。樓上の食堂に卓を圍んで謐き語れる二個の人あり。窓外の露臺、猶ほ一個の黑き影やすらふを認む。樓中の人知るや識らずや。彼の女は兩眼情と愛との涙に曇りて、物見え分からずなりつらん、頻に屈みて欄干に凭り、漸く遠かりて消えなんとするシーザルの後影を覗んとはすなり。月は中天に懸りて朦朧たり。去り往く彼は留まる彼の女を何とや思ふらん、切に慕ふ心を寄せもやすらんか。羅馬の美はしき人の中に最も美しく、其の雄辯家の中に最も雄辯なるてふ人は彼なるか。されど彼が彼の女に語りし時は、其の聲實にも優しかりき。彼の容、彼の言は爽かなりしかど、猶ほ心を奪ふ程に和かなりき。こはシーザルの女性に對する常の振舞なりき。彼は彼の女の謠ひし時に、其の髮に番石榴の嫩芽を結び付けて見き。彼の女は其の黑く縮れたる髮より、そを拔き取りて接吻し、又さめ〴〵と泣き沈みつ、毎に好みし希臘の昔譚のその中に、うら若き男女のかなはぬ思ひに身をやつしつゝ諸神の憐みにより、花と變りし疇昔の奇しき事のありたるを、想ひ出でゝは願ふ樣、われも一朶の花となりたや、シーザル殿の手に觸るゝ花となりたや、假令彼方に連れ添ふ幸多き誇れる人の、花冠に織れんとて手折らるゝまでも、その手に觸るゝ花となりたや。
遽然、樓中の一人は跳り擧りて、聲高に罵れり、此の物音に驚きて、彼の女は思ふことを忘れたり。
『若しシーザルが謀反人にあらず、又た哀れむべき恩

者にもあらずとせば、我は密謀に加はりしことを奈何にせん。』

聞きたる彼の女は戰きぬ。拔き足して窓近く進みたり。身をひたと窓帷に寄せて、人目を避けんとは忍びたるなり。

『其の上に亦た汝までも、』曩に罵りし人は、相對して語りし人に向つて言へり、『汝も彼と一味して我を陷れんの謀計なり、汝こそ自ら畫策を語り出でたる奴なるに。』

『親友、汝は我を解せず。我は如何にも畫策を呈したり、固より其の實行に與るべし。さりながら此の計畫には大膽なる政畧を要す。我はシーザルを驚かして、其の協力を失はんことを願はず、彼若し一伍一什を知り悉くさば、去つてシセロ、キヤチユラスに謀を告げん。彼は汝の擧動を怒りき、されど渾べて我が爲たる所は、漸くにして破裂を禦ぎ得たり。』

『咄々、諸神は彼を迷はす。彼は人情、寛大、節制の事を空言せり。ヘルキユリースに依つて言ふ、我はローツにゼノカリースと在りし以來、未だ曾つて斯る說法を聞かざりき。』

『シーザルは性一貫せず。彼は窮なき野心と、測るべからざる勇氣と、嘆ずべき思慮とを有す、然るに猶ほ苦痛に會しては女らしく弱きことを屢々見たり。一朝彼の隸僕彼の舁床を舁きながら、病に罹りて行き惱めるを見たる時や、彼は下り立ちて、隸僕を乘せ、雪降る中を步み歸れり。我は汝が斯る人に暗殺、掠奪、放火などを勸めしに驚く。汝宜く斯る發議は、彼の如き性質の人には、いたく厭はるゝことを悟るべきなり。』

『我は知らず。我は汝の克己力なし。我は斯る一味を憎む。彼等何の用かある。我儕は血腥き、忌々しき、淚溢るゝ事を爲すべきのみ。』

『切齒すな親友、先づ短刀下に置け。ヘルキユリースに依つて言ふ、請ふ汝の憤怒を鎮めよ。』

『休めよ、此の白痴、彼奴我儕の計畫を破らすば、我儕は枕を高うすること速かに、彼等共々飽食し、紫

の布もて彼等に被せ、美人を傍に侍らしむるを得しならんに。それのみか、あの扮粧子、可愛き女の子を騙かさんとはなす。』
『ならぬ。汝は彼が何れの美貌に對しても俠氣を示めすは、彼の性來なることを解し得ず。』
『彼の俠氣、彼の詩句、彼の慇懃、彼の番石榴の嫩芽は咀ふべきものなるかな。若しシーザル敢てせば、ヘルキユリースに依つて誓ふ、我は議場の中央に於て彼を寸斷にせん。』
『我にまかせよ。我儕は彼の才幹と勢力とを利用すべきなり、彼を難局に陷擠せよ、我儕の滿足すべき間は彼を我儕の器械とすべし、議院に於て我儕敗れなば質とすべく、若し又た勝たば贄とすべし。』
『聞け、あの音は。』
『露臺に人あり、短刀早く。』
彼は窓外に突出せり。女の子は蔭に立ちたるまゝなり。彼は飛び懸れり。彼の女は室内に突入せり、驚く一人の前を駈け拔け、電光の如く階を下る。追擊、大聲、火光すかさず彼の女に薄る。されど遂に及ばざりき。彼の女は街に走り去れり、人なき境を行くが如し。忽ち見る一隊の人、花冠を戴き、松明を照し、大館の廊下に繰り出すを、今や矢の如く走り來りし、かよわき彼の女は計らずも此の群中に投じたり。
憐むべし、彼の女は後門狼の追擊を脫して、却つて虎口に墜ちんとは。一群に率先したる美少年は、腕を伸べて彼の女の首を抱けり、衆目一齊、彼の女に集る」
『宥るせ、〳〵、皇天に對してわれを宥るせ。』
騷擾を極めし彼等は、益々叫り狂はんとす。彼の女は泫然として淚、下れり。
『鎭まれ、鎭まれ汝等をとなしからず。』
全隊は益々騷擾せり、シーザルは彼等が事を解せざるを見て苦しめり。彼の聲は泣を掩へる彼の女の心底に徹したり。彼の女はやにはに首に懸けられし手を振りほどきて、シーザルの脚下に跪きつゝ、しかと其の膝を抱きたり。月は愁顏を照して明に、彼の女の唇は動けども聲なし。彼は暫く彼の女を見て、直に彼の

女を扶け起し、胸のほとりに抱きしめたり。
「恐るゝ莫れ、我が伴、我が愛。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

こは曾つて文豪マコーレーに聞きたる昔譚の一節なり。

文　藝

歷史小說

余は家庭の長者なる嚴父と慈母とに對しては、別にいふべき事もなし、何となれば余の寸心には大人に向ていふ程の意見なければなり。故に唯幼年諸君を友として語らんことを欲す、幸に余が幼年癖を咎むる勿れ、余は幼年の友人として正しき名譽を得んことを冀望すれば。

嵯峨のや主人

歷史小說の序

流波菖蒲を慕ひ、行雲故山を想ふとは、千里他鄉の客が、月客船を照すの夕寒山の鐘聲を聞きて鄉心禁じ難く、歸る波行雲に想を寄せて、故山を慕ひしの句に非ずや。然り吾人が千里の遠きにあるや、其心は常に歌ていふ、あな戀し、あな懷しの故鄉よ。と然れども是豈旅衣着て、始て其故鄉を慕ふものならんや、其故鄉にあるの平日に於て、既に〳〵之を慕ふこと切なるなり。然り何故に吾人は其故鄉を愛して止まざるぞや。山河の風色美なるに因て然る歟、將生活の習慣に因て然る歟、抑又道德の感化に因て然る歟。或は然らん。然れども是等は第二の原因なり、吾人が故鄉を愛するの第一原は、實に愛らしき幼時の追想にあるなり、其小やかなる小豆枕を圍みし故鄉の夢、あどけなかりし朝夕の記憶にあるなり。彼長閑なる春の日に紙鳶を飛ばし、獨樂を廻はし、又は照渡る夏の日に蜻蛉を追ひ

蟬を尋ねて、家路に歸るをさへ忘れし事、或は月すみ渡る秋の夕暮、かくれん坊、鬼子ッ子に現身を拔し、又は風吹すさむ冬の朝、雪の玉投げて時ならぬ櫻の花を散せし事、扨は又初午の夜遊び、五月の菖蒲打、草履かくしに、子を取ろ子を取ろ、印地、竹馬、戰ごッこ、遊びに餘念なかりし昔を想ひては、或は又雨しめやかにふる宵に、兄弟姉妹打集ひて、舌切雀猿蟹のお宿何處のおさな物語、聞くまゝ語るまゝ夢結びけん、其いとけなかりし古を忍びては、誰歟其朋友を想ひ、其故鄕を愛せざらん、嗚呼吾人が愛鄕の心は其幼時の追想に因て愈深く、幼時の追想は愛敬の心に因て愈樂し。既に個人の身の上に於て然らば、是を國民の上に徵するも亦然らざるの理あらんや。然り吾人日本國民は將來に冀望を有すると共に、又幼時の追想を喜こぶ、過去を顧みて、我祖先は如何なる人にて、如何なる功業を建し歟之を知る事を喜ぶ。吾人は歷史に就て自己の幼時と其生活、自己の進步と其發達とは如何にありし歟を知ることを喜ぶ、父兄に就て先人の偉業勳功を詳にする事を喜ぶ、否總て是等の事は知らざるべからざるものなり、嗚呼顧みれば、吾人日本民族は如何に古より勇武活潑の種族なりし歟。見よ吾人の祖先は千里鯨鯢を斬て、鷄林を踏破せし事幾度なりし歟を、韓人は二千年の古に於て早く日本國民の恐るべきを知たり、其貢を怠るに於てや、我祖先は大和鍛冶の鍊へたる日本刀を揮つて、其王城の下に現はるれば足りしなり。よし又我文明は、印度支那朝鮮に讓りし時あるも、今日は却て彼等にまさる事幾等なる歟。又見よ、支那人が天下を呑吐するの餘威を奮て、其西陲に冦するや、吾人日本國民は如何に愛國の氣象を奮て其十萬の師を鏖にせし歟を。近世歐米各國の來航するや、偶内地の不和に因て紛亂を致せしと雖も、忽ち人心の一致するや、其紛亂を整へ來りて頻に歐米文明の

粹を輸入し、異日以て世界の競爭塲裡に雄を爭はんと欲するに非ずや、嗚呼今日歐米に學ぶの我々、焉んぞ知らん、曾て祖先が支那印度に學びて今日是を凌ぐが如く、他日吾人の兒孫が歐米を凌ぐの國民となる事のあるべきを。

若夫吾人日本人を種族上より看じ來る時は、如何に、萬邦に冠絶するの人種なる歟を知らん、嗚呼日本海の南、大雪嶺の下なる我日本國は、如何に氣候温に土地肥て、風色の美なる國なるよ。此に住する日本民族は如何に愛國の種族なるよ、彼等は二尊の末葉にして、萬世一系の帝王を奉ず、古來未だ曾て一人の背反者なし、彼等は皆一種族にして未だ曾て他種族の混和したる事なし、故に其關係は家族的なり、血續的なり、親類的なり、是實に萬國に比類なき所ならずや。請ふ見よ西歐諸國の歷史に就て、海上の覇王英國の如きも、前にアングロサクソン種族の遷移ありて、大ブリッテンの種族を驅逐し、後にノルマン人の遷移ありてアングロサクソンと混和したるものなるを。又大陸の一等國たる佛蘭西の如きも、其住民のゴール種族は、日耳曼種族の一種なるフランク人に征服せられて、兩々相混和せしものなる事を。其他日耳曼、伊太利、伊西班亞の如き皆彼中世の始めにある、蠻民大遷移の影響を被むらざるものなし。獨り我日本の民族に至りては、古來より如何なる民族も來りて混和せし事なし、唯古代の歷史に於て韓人の歸化せしもの少しく在りしと雖も、是等は大海の一滴、巨山の小石、多數日本人の中に消へて跡もなし。されば見よ、日本人は全然一種族の國民なるを以て、其關係の血續的、親類的なるを、然して見よ、其親類的血統的なるの證據は、吾人の中の年少者は、何の緣もなき他人の年長者に對しても、之を呼んで伯父樣、伯母樣、お祖父樣、お祖母樣、兄樣、姊樣と呼ぶことを。此稱呼是決して偶然に起りし

に非ず、實に國民の關係の然かく親しかりしに因て起りしものとす。此稱呼は最も明に日本民族の關係を說明するものにて、其稱呼の中には實に大なる力あるものとす。是實に日本國民の關係の血續的、親類的なるの證據にして、其萬國に特殊なる所以の一とす。萬國の家族は其關係法律的、權利的なり、日本の家族は其關係血續的、相愛的なり、是實に珍らしき民族ならずや。嗚呼皇家と國民と、君臣の分定りて天長地久萬古動く事なきは勿論なるが、其人種上の關係を論ずれば、上一天萬乘の聖主を始め下伏猪の床の賤民まで、皆一種族より成りて、絕えて他種族の混和を許さゞるなり、倘踏入りて論ずる事を許さば、皇室は正嫡にして國民は庶流なり、皇室は根幹にして國民は枝葉なり、豈根幹枯れて枝葉獨り榮ふるの理あらんや、枝葉枯れて根幹獨り大なるの理あらんや、此に於て歟皇室は國民を愛し、國民は皇室を戴きて、互に相思ひ相忘ず、萬古變はる事なきの間に、永く國家血續の關係を維持して國民の一致を保つ、是實に日本民族の他の民族に異なる所以にして、其特性又根を此に取るものとす。

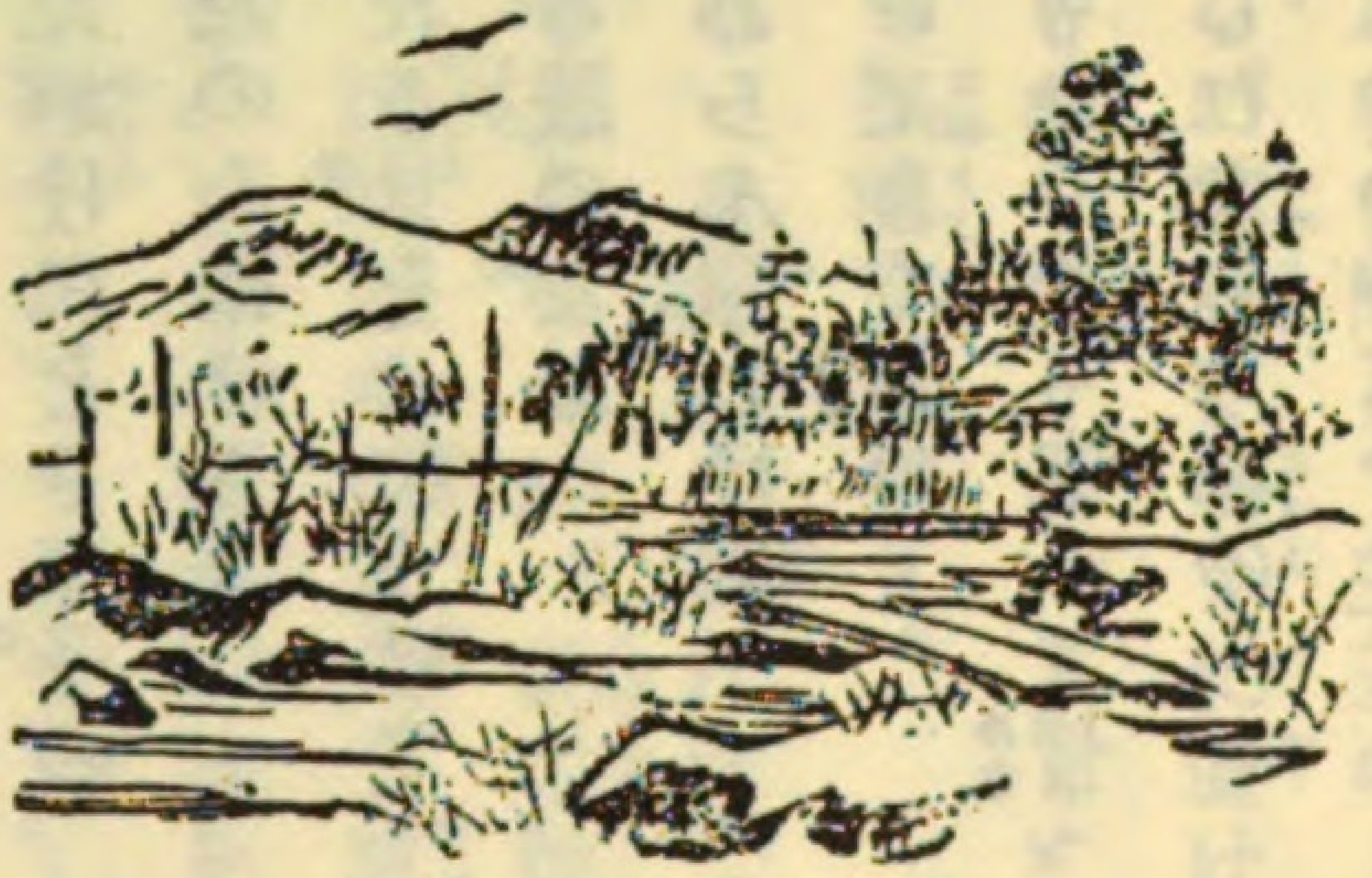
蓋し國民の發達とは其特性に因て發達するを云ふなり、松は松の特性に因て發達し、杉は杉の特性に因て發達し、檜は檜の特性に因て發達し、英國民は英國民の特性に因て發達し、佛國民は佛國民の特性に因て發達する如く、日本國民は日本國民の特性に因て發達するものとす。佛人はミルの經濟書を讀むも、シエクスピヤの戲曲を讀むも英人になる事出來ず、又英人はモンテスキユーの萬法精理を讀むも、ルーソーの民約說を讀むも佛人になれざる如く、日本人は孔子の論語を讀むも支那人になるの憂もなく、コツホの肺病治療術を覺えたりとて日耳曼人になるの恐なし、何となれば日本人は日本人の特性に因て發達するものなればなり、故に史を讀む者は、先づ國民發達の順序を考究し

て、眼を其特性の根本に向て注射せざるべからず。余此頃日本國民の歷史を想ふて、少しく感ずる所あれば聊か史談を試みんと欲す、若し拙を以て棄られずんば幸甚。

里の小川

湖隱子

里の子どもか打つれて、
うろくづすくふ里川は。



我かすくひたる時のごと、
今もさら〳〵なかれけり。

をり〳〵出來る翁らの
語るをきけば、翁らが、
いたづらしたる古も、
さら〳〵今にことならす。

魚とる子等をつぎ〳〵に、
齡とらせて代らせて、
里の小川のさら〳〵と、
いつまでいとけなかるらむ。

家づとに

藤島雪子

胡蝶の舞につれられて
ひばりなく野にたとり來ぬ
やよや兄君きゝねかし

木の志たかけにをさな子の
うたへるうたのあはれさよ
　てりわたる日をせにうけて
小草かりゐる賤の女は
　母にやあらん嬉しけに
みゝかたふけてきく樣の
たかきもひくきもなへて皆
子をいつくしむたらちねの
　こゝろにわかちなけれとも
うはよもりよと人々に
　かしつかれゐるをさな子は
かゝる情をまのあたり
見るよしもなく生たゝん
あはれ彼子の身にまとふ
　母が手つからたちぬへる
つゝれの衣なか〳〵に
　あやにしきにもまさるらし
けにいひしらぬ美くしさ
菫わらひの生ひまじる
芝ふのうへに持てこし
　筆とり出てゝ兄君よ
紙とりいてゝ兄君よ
　うつしたまへや彼のさまを
さらはいもとは歌よみて
　父母の君へのつとにせん

嬰兒（つゞき）

一　生

駄菓子を捧げて犬に向ひパン〳〵と呼ぶの彼れは、其遊び友達に向ひても、年長の小兒等に向ひても亦駄菓子其他の食物を捧げてパン〳〵と呼ぶなり、如何に犬が彼れに向つて吠ゆるとも、彼れは少しも恐るゝ容子なし、ある日守り女に背負はれて買物に行たるとき、牛と見まがふばかりの大犬に吠へられ、守り女は顔色青くなりて歸りしが、彼はニコ〳〵しながらパン〳〵

と呼びつゝ歸り來りぬ、

此頃彼れは、鳥類一覽なる掛け物の前に坐して、祖母より鳥の鳴き聲を聽かしめらるゝ事なるが、最早鳴き聲によりて三四の鳥を指すやうになりぬ、例へばコケコッコーと呼べば鷄を指さしカァ〳〵と呼べば鴉を指さしオトッサン、オッカサンと呼べば鸚鵡を指すの類なり、而して國民新聞社員の寫眞を見せたれば、彼れは亦た一々に指して鳴き聲を效へよと求めぬ、依りて其寫眞中彼れが見知りたる顏二三を指さして名を效へたれば、彼れは最早名を聞きて二三の人を指さすやうになりぬ、又た故らに寫眞を倒まに置けば、彼れは見るに不便を感ずるものゝ如くクル〳〵と廻はして正しく置き、而して後ち熟視するなり、

守り女の名を「つね」と云ふ、彼れは「つね」と呼び得ずして「うね」と呼ぶとなるが、此頃彼れは母に背負はれて病院に行き、襷がけの女を見て直ちに「うね」と呼びけるとぞ、おかしきは彼れが屁を放つて、何處へ落ちたるかと云ふ容子にてキョロ〳〵眼にて搜すことなり、

ある日又た母に背負はれて、燒芋を買はんとて出掛けるが、燒芋屋は店の摸様を變へて、氷屋とならんとて支度中なりしかば、其入り口まで行きて直ちに引き返しぬ、彼れの號泣一方ならず、母の腸は九廻、

彼れは叱らるゝとを知りて、故らに人を戲弄するやうになりぬ、父が新聞紙を讀み居れば、彼れは來りて父の顏を見ながら新聞紙を蹈むなり、飯櫃の蓋へ足を加へて、ニャ〳〵笑ひながら祖母に叱れと促すなり、守り女と家外を歩むときは、彼れ手指に土を付けて身邊へ持ち行き、オイ〳〵と制止するとを促すなり、又た此頃は頭など打ちたる時は、祖母がチチンプイ〳〵など言ひて撫でゝやるゆゑ、彼れはわざ〳〵柱や敷居へ觸るゝか觸れぬほどに頭を加へて、イタ〳〵と呼びながら祖母の所へ撫でゝ貰はんとて行くやうになりぬ、

彼れが家外を歩むやうになりてより、己れの後かけ草履を厭ひて母の駒下駄を穿かんと求むるとあり、馬鹿

ヤイと云ふ意味にやシロコ〳〵イーと呼びて齒をむき出すとあり、傍人が遊ばうと言へば彼れは「チ」と云ふ助辭を加へ、御年は幾ッと問へば、フターッと答ふ、彼れは實に猩々の如く鸚鵡の如し、されど彼れは鸚鵡よりも進歩し居るかと思はる、鸚鵡は人の言ひたる通り眞似すれど更に進みて答ふることなければ、

彼の父が二週間ばかり不在なりしとき、トッチャンはと彼れに問へば直ちに入り口へ走りて、障子の隙より窺ひ居たりと、コハ彼れが障子の隙より窺ひ居たる際に父の歸りし例し毎々あればなり、又た簞笥の抽斗より父の寫眞を出して見せたりけるが、それより毎日簞笥の前へ行きダイチヤン〳〵と呼びて父の寫眞を出ださんことを求めたりと、若し彼れの手が届く處なれば、彼れは自から抽斗を抽きて寫眞を出す筈なれど、簞笥の最とも上なる抽斗にて彼れの手は届かざりしなり、又た芝金杉橋を車に乘りて通りたるとき、彼れの父に肖たる躰格の人が、父の帽子及び羽織と類似のものを着て通りしかば、彼れは直ちにダイチヤンと呼びしと、

雛雀

戰雲霽れ渡りて、弓張月の影草を出てゝ草に入りにし武藏野も、民の竈の煙賑ひ立ち、德川二代の天下愈太平とぞ見へける。

三代將軍（家光）未だ稚くして竹千代君とかしづきまゐらせ、一日庭に戯れつ、ふと父將軍（秀忠）の寢殿の軒端に雀の巣くひて雛生ひしを覧、『あれ欲しや』といひ出で、御遊伴松平長四郎に『捕りて參らせよ』と言ふ。長四郎時に十一歲なり『如何にも叶ふまじ』と辭しけるに、侍ふ者共『晝の程に巣の樣を能く見置き、夜に入りて此方の軒より傳へ行き之を捕りて參らすべし。成人は身重くして足音せんものを』とそゝのかしければ、彼は詮方なく諾ひぬ。

斯くて日もやう〳〵暮れければ、千代田の城の大奥も

夜の森に包まれつゝ、限りなき平和は闇の手を以て滿城を聲無きに壓しぬ。

將軍（秀忠）は寢殿に入りて御臺所と物語り居けるに、こは如何に夜の平和を破る物音どうと坪の中に聞えける。何事ならんと、刀おつ取り立出るを、御臺所も脂燭して同じく戸を明けさせたまふ。覗れば長四郎轉び居ぬ。

『汝は何しに此處には來りつるぞ』。

『晝の程此の屋の軒に雀の子を產みしを見置きたれど、餘りに欲しければ參りて候』。

『否、そはよも汝の心より出でしにはあらざるべし』、將軍は言ひぬ『明にそは誰が敎へしかを余に告げよ』と。

彼は答へき『何人にも敎へられしにあらず』。

『否、必ず敎へしものあるべし』。

『決して候はず』。『何人にも敎へられしにあらず』と、彼は遂に其言葉を變へず。

將軍『斯うまであらがふは己れ不敵者よ』と、大なる袋の內に彼を入れ、『よしありしまゝに言はざらん程は、何時までも斯くてあるべし』とて之を傍の柱に掛けぬ。

將軍は臥したまひき、夜は靜まりぬ。寂々又かう〳〵。雀の子よりも先きに捕はれし彼は、如何に此の夜を袋の中に明しつるぞ。

夜既に明けて、將軍は晝のおましに出でたまへり。御臺所は女心の心弱くて、彼が健氣なる心根をあはれに覺し、手づから袋の縫目を解きつゝ朝餉を給ひ、又本の如くに縫ひ置かせらる。

晝の程將軍入り來りて重ねて推問ありしかど、元の如く更に詞を違へねば、御臺所樣々に傍より仰あり、『此後はゆめ斯る事すな』と痛く戒められて宥りける。」

將軍曰く、『長四郎が今の心にて生立んには、竹千代の爲には天晴れ忠臣にてあむなれ』と。果せる哉、寬永の明相松平伊豆守信綱とは、實に長四郎の事なりき。

新刊書

『罪と罰第二卷』　自助生

不知庵主人の譯せる『罪と罰』は其第二卷を出しぬ。

第一卷は罪に到るの途上及び罪をなしたる瞬間を叙し、社會が如何に殘酷に彼を其罪に驅りし乎、一種の病氣が彼の手を執て鈍を揮はしめし時、如何に自覺力なき彼は今更の如くに其自家を驚懼したりし乎を説きしも、第二卷は其漸く昏惘より常に歸らんとして、彼が其行爲に對する嫌惡すべき報酬は愈近く彼に迫るを示しぬ。

而して罰の彼に迫るや多端なりき、好事も迫り不好事も迫りぬ。彼が眼には親友も時に探偵なりき。彼が眼には自家の影も時に追兵なりき。作者之を書き分けて能く其致を極めり。

看よ、快活なる其友と嬌飾を好む若き醫師との心なき會話が如何に彼の罪を詰問せしぞ。其最も嫌惡する自家の姉妹の友たらんと自ら薦むるがしだてする人が如何に彼の罪を嘲ける如くなりしぞ。圖らずして料理店にて邂逅せし一の警察官が如何に彼を探偵しまはるに似たりしぞ。不幸なる醉漢の家族が如何に彼を猜疑を以て煩らしぞ。其極めて溫柔なる憐むべき娘が如何に不思議にも彼を少しも永く此世にながらへしめたく思はせしぞ。最も愛する其妹と母とが卒然に來りて如何に彼が心を痲痺萎縮せしめしぞ。愛情も此時の彼が身には亦甚しき苦痛なりき。特に彼が過日殺されたる老婆に典しぬる或品を得んとして警察官を訪ひし時如何に恐ろしく如何に嚴しき審問に逢ひたりしぞ。而して其忽ちに姓名をも知らざる一のあやしの男の爲に殺人者よと叫ばれし時に至ては如何に慘たる惱きが彼を窘きしぞ。讀て是に至る、人をして覺へず慄然として身ぶるひせしむ。

嗚呼、世の所謂罪なるものは斯くも恐ろしく隙間なく内部より襲ひ來る敵なる乎、或る者の爲に鈍を揮ひたる血ある器械は斯くも慘酷なる報酬を受けざるべからざるの義務ある乎。

アヽ悲慘幽暗の光景寫し來て漸く迫れり、將に一段の活地獄圖遠からざるに現し來らんとす。第三卷の出る、我れ之を待つことその久しきに堪へず。

若し夫の描寫の妙翻譯の巧は、今言ふ迄もあらず。

＊　＊　＊　＊　＊

而して此書の所謂學者向にして素人向にあらざる事は余曾て之を言ひしが、果せる哉學者は見て悉く之を讚嘆したれども世人の之を買ふ者は極めて稀なりしと聞く。昔者錢舜擧其得意の畫を世人見て之をそしれば、彼は却て喜びき。今此書の售れざる、售れずして便ち其價値を見るべし。

家政

一二の裝飾

近來、小兒にも帽子を被らしむるの風あるより、少からぬ金錢を帽子に費すとて、一家の母は數々嘆息するものあり。勿論、一々流行を追ふことは、經濟上決してよき事にあらず、また輕々しく流行に動かさるゝは、子女の心得のためにもよからぬ事なり。去りながら兎角新奇を好むは子女の常なれば、母たるものは金錢のかゝらぬ限り、浮薄なる流行兒となさぬ限り、時々新案を出して子女を悦ばしむるの心術なかるべからず。

假令へば帽子につきて云はゞ、帽子の中最も目立つものは、其額にある絹若しくは木綿の帯切れなれば、母は時々新しき色のものを代用せざるべからず。また其帽子全躰の形を變らしむるの力あるものは、帯の正面若しくは横にある飾なれば母は注意して之に新案を與ふべし、



上に示すは此頃米國に流行するものにして、何の切れ地にてもよし、唯だ花の形に似せ、若しくは虫の形に似するのみ。

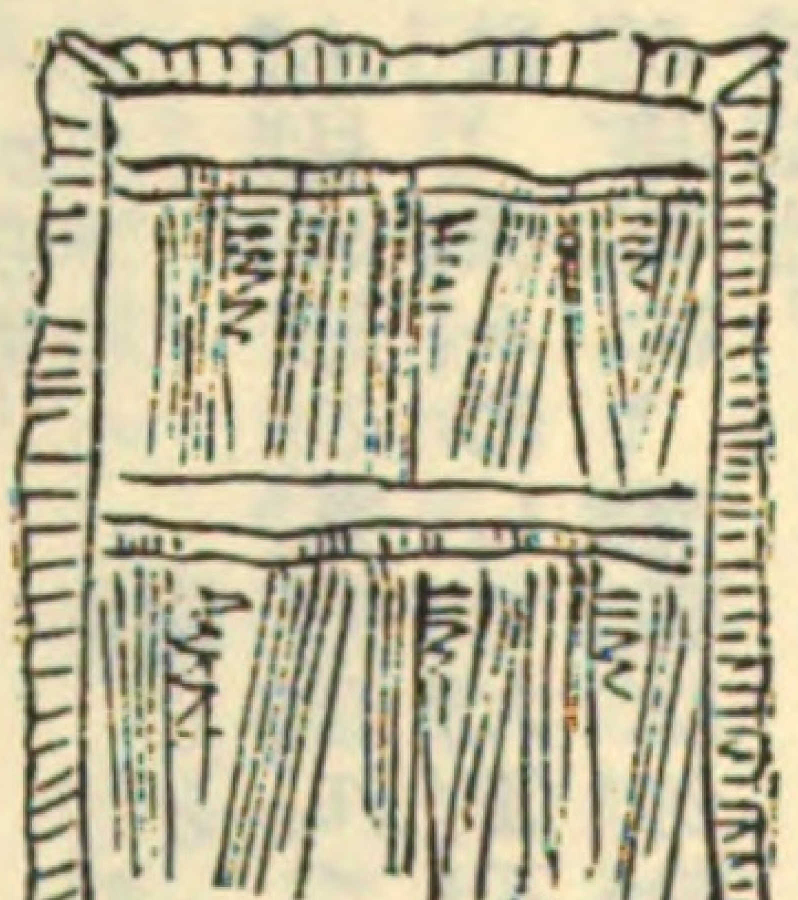
凡べて此等のものは、一定の規則あるにあらざれば、新案を出したるものゝ勝と知るべし。

また此に少女を悦ばすべき、最と新奇なる一方法あり、そは一錢一厘を費さずして、一個以上の帽子飾を得るの方法也。

先づ野外に咲ける鬼薊の花の、已に萎みて花の先の黒くなりたるを取り、其の花の先きを黒き絹糸にて相應に固く縛りて、其花のへタの處を、爪もてかきさくべし。さすればへタの處は、一様に開きて花のさきの縛りたる所こそ、却つて花の莖となり、花のへタ、却つて花となるが如くなるべし。之を火にあぶれば、忽ち大きく膨脹して、且つ縮れ、極て奇麗なる花となれば、之を好みの色にそめるなり。さすれば何とも云へぬ美麗なる花飾を得べし。其美なること一二圓の飾のとても及ばざる所也。

總じて帽子は、帽子よりも其飾の方高價なるものなれば、廉にして且つ手輕なるものを應用するの心がけは、母として肝要なり。

また一家内にて靴の置所には、往々困るものなれども、左の如き靴入嚢を作りて壁にかけなば、却つて家内の飾となるべし。



其の法は圖の示すか如く、木綿若しくは種々の切れ地にて、靴の片足を容るゝに足る書翰入れの如きものを作るなり。小供の靴入、婦人の靴入、男子の靴入各々別の色合を見つくろはゞ、一層美麗なる

べし。

育兒の經驗



乳をもどす病

小兒は何事をも語る能はざる木偶の如きものなれば、母は小兒の思想をよく〳〵かみわくる讀心術の先生か、若しくは醫者となるの覺悟なかるべからず。假令ば同じく乳をもどすにも、塲合によりて性質の異なることあり。固まりたる乳をもどすものは、胃の弱りたる證據にして、かたまらぬ乳をもどすは、乳を飲みすぎたるものと知るべし。故に固たる乳をもどす小兒には、速に重酸ソーダを飲ましむるを怠るべからず。其の分量は、生れてより四ヶ月までの兒には、簪の耳かきに一盃、それより一年位の小兒には、四杯ほど、乳に交へて飲ましむべし。固まらぬ乳をもどすものは、飲みすぎたるのみなればさしたる害なしと雖も、之を放任すれば胃腑の張大病となるべければ、注意して適當の分量に減ずるを怠るべからず。

通じをよくする法

小兒が母の乳を離れて、通常の飲食を爲すに至るの際は、往々にして大便不通となりがちのものなり。此かる時には、灌腸は勿論必要の事ながら、食物の事より注意せざるべからず。即ち熱き粥の中に生卵を投じて、かきまはし、半熟となりたるを、粥と共に與ふべし。さすれば通じのとゞまらぬものなり。かつ曾つて前號に記したるが如く、ひきわり交りの粥を用ゆるを怠るべからず。

小兒の萬病丸

硼酸は小兒のある家には、一時も欠くべからざる品なり。先づ毎朝小兒の舌を洗ふことは、種々なる疾病を除くの良法なれども、舌の根に白きかすの生じてとれぬことあり。之をとるには、硼酸水を以てふきとるべし。

小兒の目に、故なくやにを生ずることあり。通常は每朝清潔なる水にて洗ふを可とすれども、非常の時には、硼酸水にて洗ふときは直ちに治すべし。
小兒には故なくして汗ものゝ如きもの、面上に出來るものにして、放任せば醜き腫物となることあり。速に硼酸の粉をふりかくべし。また腋の下のたゞれ、指と指のたゞれ等にも、硼酸をふりかくべし、其効あること驚くべし。

調理小話

菓物の好時節

胡蝶も最早や舞ひ出でぬ、所々の庭園には、西洋いちごは今を盛りと實のり出せり。之よりは追々と天の靈菓も、人間の口に入る好時節となりぬべし。去れども菓物の好時節たる、猶ほ花季の短かきが如くに短かくして、盛り久しからねこそ遺憾なれ。此の短かき菓季を長くせんとて、菓物罐詰の法を案出せるは西洋人なり。之より少しく菓物罐詰の秘傳を述べん。

先づ一般に注意すべきことを述べんに、菓物の罐詰を作らんには、朝涼しき內、若しくは午後四時過きより、七時頃、夜に至らぬ間の涼しき時をよしとす。
罐詰にせんとする菓物なり、野菜なり、凡べて正に熟したるものを用ゆべし。決して熟し過ぎたるものを用ゆべからず。是れ凡てを腐敗せしむる基なり。
明日罐詰せんと欲する菓物は、今日之を幹より取りて、冷なる所に、ザルの如きものゝ上に保存すべし。是れ水氣を去るためにして、また今日は野に出で、明日は家內にて仕事するの分業法にして、心經の勞を除くの法也。
さて之より罐詰の法を述べんに、菓物の性質によりて同じからずと雖も、目下西洋いちごの時節なれば、いちごにつきて述べん。いちごの罐詰法は、曾て前號の紙上に述へしが、猶ほ完全なる法は下の如し。
先づ罐詰にせんとするいちごは、六月より七月の初までの間のものたるべし。之より過ぎたるものは罐詰に適せず。また此間と雖も傷のあるもの、または不完全

なる形のものは用ゆべからず。菓物の一匁に對して、三匁の白砂糖を用ゆべし。先づ此の砂糖の溶解し得るだけの少量の水にて、砂糖を溶解し、之を清潔なる鍋にかけて、火上に上せて、暫時の間煑て、砂糖の粒をなくならしめ、之にレモンの液を一さじほど加ゆべし。此くの如く一方の砂糖の方用意の出來たる時は、直にいちごを手に取り、一々其のヘタを取りて、之を罐の中に入れて充つるや、一方の砂糖汁の煑へ沸きたるものを取りて、いちごの上より之を注ぎ、直ちに之を罐を煑る鍋の中に入るべし。此の鍋の中には、豫じめ熱湯を貯へをくべく、而して鍋の深さは罐の高さに及さる樣にして、湯の罐中に入らざるを度とす。此くて罐を熱湯の中に入るゝや、直ちに時計を見て、五分程煑たるを見ば、直ちに罐を取り上げて、之に蓋を爲し、上より封蠟を施すべし。而して其全くさめたるを見て、後ち暗黑にして日光の通ぜず、成るべく冷かなる所に砂を敷き、其上に罐を並へて貯蓄すべし。

林檎、桃、梨、李の罐詰も、凡べて右の如し。唯だ此等の菓物は、いちごよりは二十分間も長く煑るの差あるのみ。

此法は學者の説にあらず、實際家の經驗談なりと知るべし。また菓物を直ちに鍋の中にて煑ず、罐に入れて熱湯の中に入るゝは、菓物をして燒つかしめず、また天然の香氣を保存せしめんがためなり。讀者は以上の菓物の外、何にても凡べて此の法を斟酌して試みらるべし。唯だトマト(赤茄子)アスパラガス(松葉うど)等の野菜は、一旦鍋にて煮たる上に罐詰にするを可とす。

夏時の注意一二

若し鳥肉獸肉等を購ふて、即日食ふ折なくして、一二日も貯へんとせば、肉と肉の際に木炭を挾むべし、是れ腐敗を防ぐを得べし。

夏向となりては、日光の反射甚しきより、また熱氣甚しきより、目力の衰へて眼病となることあり、之には他の藥を用ゆるよりは硼酸水にて洗ふを可とす。夏期に入らば毎家醫師に乞ふて硼酸水を作りをくべし

また夏期には水の性質によりて、身躰の健康を害する

ことあり、殊に硬水に至りては、皮膚を害するの恐あれば、風土になれぬ地に旅行する時は、硼酸を携へて旅行し、硬水を見ば、少量を投して用ゆべし。また害虫を殺すの効あり、但し其分量は醫師より命令をきゝくべし。

明家に移るときは、新たに疾病を得るの恐あれば、熱湯に洗濯ソーダを溶解したる汁もて、全家を洗ふべし。

如何にせば蠅を驅り得べき

毎年夏期の大問題は如何にせば蠅を驅り得べきの一事にあり。如何なる家にても、十分此問題を解釋し得たる人とてはなし。蠅を惡むの文を作るも、其効なく、鳥もちを並ぶるも、其効なく、六尺の人間、空しく微細なる虫に及ばずとは、實に此の蠅の一事なり。然るに外國の家庭雜誌は、新規にして美麗、且つ忌はしき外見なき驅蠅法と題する新法を報じこせり。其文は左の如し。

蠅の驅除法には、萬人皆な心を勞せり。然れども坐敷などに使用して、美麗に外見よき法とてはなく、人々皆な、何れか草の類にて、人に害なく、蠅に害あるものはなきか、さすれば之を鉢に植へて、卓上におかば、一は家々の飾ともなり、一は驅蠅の効ともならん、此かるもの、何にかあれかしと思ひ居たりしが、此頃一の新奇なる草發見せられたり。

新奇と云ふも、其實は人の知りあきたる草、即ちクロバア（馬ごやし）なり。此草を卓上に簇からしめ、若しくば其の數莖を窓にかけなば、驅蠅の功は他の驅蠅藥に勝る萬々ならんと。

此のクロバアとは、げんげ草とも云ふものにして、我國にては田の畔にある三寸ばかりの簇生草花なり、花には、白あり、黄あり、紫あり、極めて奇麗なる草花なり。

竹の子食用の新案

竹の子の時節も追々と終り、其風味も新竹子の如くに行かざることとなるが、此に新案あり。此新案の如くせば、新竹の子にも勝る味を得べし。其法は通例竹の子を食ふには、皮をすて、後に之を煮ることとなれども、

さはせず、皮をすてず、皮のまゝにゆでゝ後、皮をすて、更らに之に味を付くれば、風味もよく、また通例よりは柔かになるものなり。

また竹の子を味噌汁の實とするに、最早や此頃は硬くして、味なきものなれども、之を薄く切りて一寸、油にていためて、後に味噌汁に入れば味一層よし。

第八號卅四ページ『コンデンスミルクを用ゆるの注意』と題する一頁中に『小さしに平らに乳を盛り湯をさましたるものすこし計りの中に溶解し云々』とあるは『小さし山盛一ぱいに湯のさましたるもの一合計り』の間違なるにつき茲に正誤す

手藝案内

洗濯と洗濯器

日増に夏向となりぬればいよ〳〵洗濯の時節となりぬ、袷、綿入等とは違ひ單衣は甚だ汚れ易く垢染み易ければ怠らず濯ぎ洗ふが肝要なり、又冬衣、夜着、蒲團等は梅雨の時候に遇ひて黴を生ずるものなれば時を過さず解きほどきて洗濯すべし、若し時過ぎて黴の固まるに至らば後悔詮なかるべし、尤も絹衣にて黴生の患なきものは洗はぬがよろし、

さて洗濯の方法は誰人も知らるゝ所なるが茲に注意すべきは洗濯に用ゐる水なり、水は場所によりて大に異なり、鹽分、鐵分、泥分を含み居れば、是等の硬水を用ふるは甚だ洗濯物に宜しからず、蒸餾水若しくは雨水の如き軟水を用ゆべし、去りながら洗濯用水は孰れも多量を要するものなれば雨水などにては間に合ふまじきゆゑ、沸騰せしめたる湯を用ゐるに如かじ、左すれば石鹼等も能く湯に溶解して洗濯の效も著し、

洗濯にかゝる前には能く天氣を見計ふべし、近日の如く雨天續きにては大物（夜具、蒲團其他）の洗濯に取かゝり中途にて雨に遇はゞ大に難儀を極むる事あれば、天氣豫報等に注意し置くべき事なり、

木綿の單衣物を洗ふには清水又は米泔汁にて石鹼を用ゐ能く〳〵揉み洗ふべし、殊に襟、袖、臀、腋の諸部には氣を注けて、

絹布は成るべくは洗はぬ方宜しけれども垢等附きたらば致方なし、石鹼を溶かしたる湯又は米泔汁に浸し揉まぬやう打ち振り動かして洗ふべし、「フノリ」をもて洗へば其效著しけれど「フノリ」代の費用を要するな

り、而して地質の強弱色合等に留意し損傷なきやうにすべし、

白地の物を純白ならしめむとならば手にて揉む位にては容易の業にあらず、其前に苛性「ソーダ」にて煮るなり、されど此法は地質を損傷する患あれば「ハンケチ」等の小物を除くの外は絹地に用ゆるは悪し、

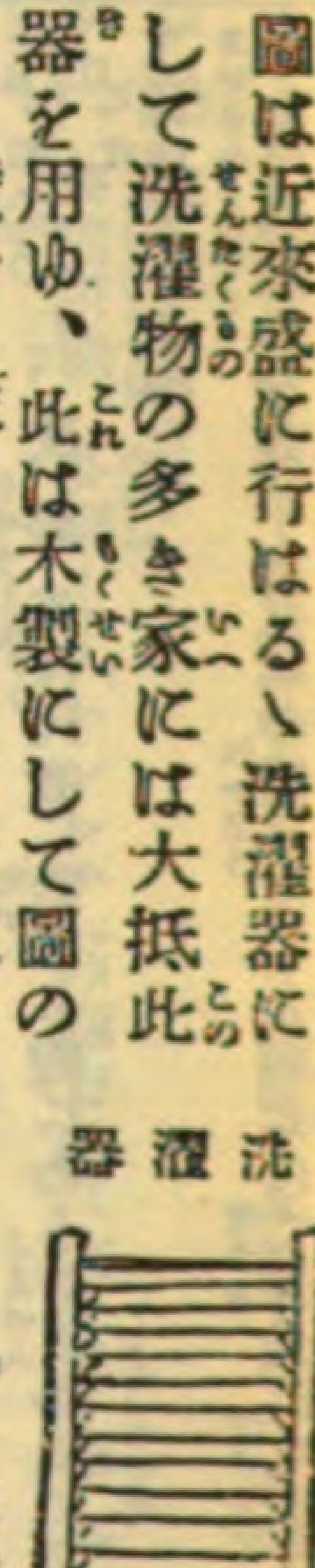
毛織品を洗ふには微温湯と石鹸を適宜に混和せしめ、之をもて濯き洗ひ能く〳〵絞り度々振りて竿にかけて乾すべし、

「フランネル」の黄色と變したるを洗ひ落すには白石鹸百七十目硼砂二匁五分を清水に混和し洗ふべし、永く水に浸し置くは悪し、暫時にして乾すべし、

彩色ある織物を洗ふには熱湯に灰汁を混和して洗ふを良しとすれども、絹物に試むべからず、

深紅色の布を洗ふには糠に沸騰したる湯を注ぎ、之を漉し布を浸し洗ひ終りて再び熱湯を注ぐなり、酢又は石鹸水に檸檬水を混和して洗ふを良しと言へども未だ試みたることなし、

從來の洗濯法は兩手を以て揉より外は他に良法なし、斯の如きは徒に時間を費し、多く疲勞を覺え、且つ掌を擦り剝く下女などは殊に憐むべし、下に掲ぐる圖は近來盛に行はるゝ洗濯器にして洗濯物の多き家には大抵此器を用ゆ、此は木製にして圖の如く段々を刻みあれば、其上に洗濯物を載せ滿身の力を籠めゴチ〳〵揉み附くれば、如何なる雜物といへども洗濯し得ざるものなし、且つ時間もかゝらず、左程疲勞を覺えざるなり、此器一臺三四十錢、勸工塲邊にて賣る、


洗濯器

洗濯物絞りも手にては隨分骨の折れるものなり、家庭雜誌第四號に記載ある米國にて行はるゝ洗濯物絞り器械は至極妙なり、これなれば八九歳の少女にても厚布帛を容易に絞り得るものゆゑ重寶之に過ぎず、詳しくは同號を參照ありたし、

筆の序に洗張の法をも記さむ、洗張には張板と籡子張（又は篠張り）の二法あれども大抵は板張を重に用ゆ、籡子張に至りては絹地の如き丁重を要するものか長き反物に用ゆるものなり、

板張を爲すには板は大抵家外にあれば汚泥を蒙むるもの多し、故に先づ板を奇麗に拭きて然る後試みざれば洗濯物に汚泥の附着する患あり、籡子張は籡子（竹片）を一尺越程に隔てゝ反物を張り廣き庭にて長く空中に

乾すべし、板張も同樣成だけ日當の能き處、塵埃等のかゝらぬ處、墜落等の恐なき處を撰て能く乾すべし、

洗張に用ゆる糊は絹物には「フノリ」、これは品質を痛めず光澤を增すなり、木綿物其他には米糊、葛糊を適宜に用ゐて宜し、然し餘り多量に用ゐなば、肩衣の如くしやちこばりて膚に快からず、糊を着くるには孰れも布帛の裏よりすべし、

洗濯物の乾上り火熨斗を用ゆるには（重に絹物）厚紙又は布を敷き其上を微火にて徐に押すべし、燒き焦けては大事なり、絹物等に雨、霧などのかゝりし時は同樣火熨斗を當つべし併し縮緬等は甚だ縮み又は延び易きものなれば他の部分と違はぬやう心して火熨斗を運び玉へ、

社交一斑

西洋禮式一斑（承前）

洋癖子

喪禮

我國にては喪に西洋の禮式を用ゐるものなし、只、僅に葬式に基督教の式典を用ゐるのみ、然れども追々外人と交際頻繁なるに從ひ其禮法をも一應心得ざるべからざれば左に

死亡の通知――死者ある家に在りては速に知人朋友に之を報すべし、平生死者と不和なる人にも知過たりし以上は必らず告げ知らすべし、蓋し死は遺恨も嫌惡も悉く消滅するが人情の常なればなり、死亡の報告は大抵新聞紙上に於てす、

弔狀――死亡の通知を受けたるものは直ちに訪問して名刺のみを通し置き面會せざるを可しとす、但し親族は此限にあらず、訪問せず名刺を郵送しても差支なし、弔唁は寺院等にて面會の節に讓るべし、又直ちに弔狀を贈るも宜しからん、而して其弔狀は成るべく丁重に悲傷の意を表す可し、「一筆啓上草々不一」の短文は惡るし、

會葬の招狀――葬式の前日知己朋友に送る、遠國の人には後に其の旨を通知す、

葬式――葬式の事は宗教に依り異同あればワザと記さず、

會葬者の衣服――婦人は黑色の毛織又は縮緬の禮服着用、男子も大禮服に純白の頸飾、黑の革手袋を用ゆべし、我國にては帽子又は腕に「クレップ」といふ布帛を纏ひて悼意を表す、

會葬者の心得――死者の柩を墓所に送るに會葬者は柩に接近すべからす、葬送の行列中にて笑語空談甚だ忌むべきもの、必らず靜肅と沈默とを守るべし、又乘車は死者に對する禮にあらざるを以て柩に從ひて徒步すべき事なり、

最近親族の會葬――日本の禮法にても葬式に亡夫又は亡妻又は亡兒を

野邊送を爲すを忌むが如く、西洋にても亡夫亡兒に會葬せざれさ、近年は此禮式に據らざる向さなりたる由、さて葬送の行列には第一番に最近親族の男子、次に他親族、次に知己朋友、次に其他の人、

會葬者の名刺——葬儀終りたる後直ちに死者の家に至り、名刺を裏面に折りて通し置くべし、若し同日に此義務を行ふ能はざれば其翌日速に之を行ふ、

死家の忌引——亡夫に對する婦は喪期二個年なり、即ち大喪一個年、常喪六個月、半喪六個月、喪中寡婦は黒服の上に長き黒布を被ひ、「ボン子ツト」にも黒布を縫ひ、家に在ても忽にすべからず、長き黒布は喪期の經過に從ひ段々に裁り去るなり、而して衣服は凡て修飾なき毛織を着し、髮は唯た束ぬるのみ、半喪に至りては黒縁を引きたる白毛織を着するを得れども「レース」其他の飾品を用ゐるは不可なり、又大喪中さ雖も黒白相半する衣服を着するも妨なし、亡婦に對する夫の喪期は短し、即ち大喪六個月小喪六個月なり、而して其大喪服は光澤なき黒服、帽には黒布を着け、純白の頸飾を用ゆ、小喪中は帽に黒布を點するのみ、通常鼠色の袴及手袋を用ゆさなり、夏期なれば白き「チョキ」を着けて妨なし、父母の喪期も一個年、即ち大喪六個月常喪三個月小喪三個月、但し女子さ雖も衣服の上に長き黒布を着けず、祖父の喪は六個月、叔父母の喪は三個月、兄弟姉妹の喪は四個月、從兄弟の喪は六週間さす、凡て喪中は質素さ靜居を旨さし、殊に喪の初期中には舞踏會、音樂會、夜會等其の他の公會に出づべからず、又人を訪問するこさも成るたけ謹むが宜し、人より訪問せられて單に接待に出づるは妨なし、

手巾、書簡用紙、名刺——「ハンケチ」の四方には大き黒條を施し其周圍は縫縮せず、記號も黒糸を以てす、大喪中の書翰用紙は其縁に巾一「サンチメートル」(我三分三厘)の黒條を施し、半喪に至れば其巾を四分の一に減ず、狀袋及び名刺を同斷其縁邊に黒條を引き、封蠟は黒を用ゆ、

流行の栞

春夢

帷子地さ浴衣地

本月よりはいよ〳〵帷子さ浴衣の時候に赴きぬれば給樣を添ゐて其流行を記さむ、

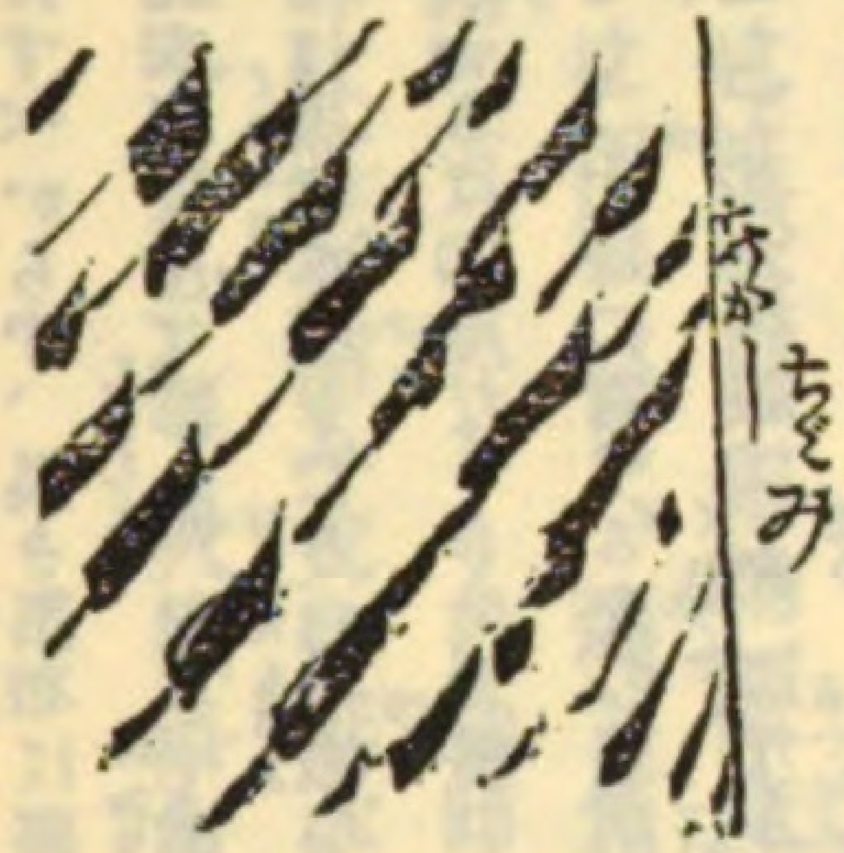
男羽織——黒絽(價四圓五十錢より七圓五十錢)にて差支なし、強ひて好まば白の越後透屋(三圓)又は白の米透屋(二圓八十錢)又は白の保多織(二圓二十錢)又は白紗(二圓五十錢より五圓)を黒の三紋に染めて着すべし、但し染賃は目下一圓より一圓十錢迄の相場なり、

同帷子地——第一流行は白越後(四圓半より七圓)か奈良晒(一圓十錢より二圓五十錢)を藍鼠(染賃三十五錢位)の三紋に染め前段の羽織を着すれば最好の夏禮服さなる、次に縞物及絣に至りては第一を薩摩上布(七圓より十五圓、二十圓より三十圓)第二を越後上布(五圓より七圓、十圓より十三圓)さす普通品に至りては越後縮(三圓五十錢より四圓五十錢)なり、柄は大低一樣にして飛白に至りては例の十の字

最流行、縞は千筋萬筋にして大名縞に至りては若手の男に用ゐて可なり、

婦人向帷子——は絽地を藍鼠又は利久鼠のフキ模様の三紋に染め下重を白練又は白麻を着す、これ最も本年流行の第一位を占む、年齢若からぬ人には無論フキ模様なし、染賃仕立賃共一重代價並八圓五十錢中十二圓上十五圓なりと、其廉なること冬物に比し大なる差ならずや、

同縞物——最も珍奇にして最も高尚なるは絹上布（六圓五十錢より七圓五十錢）か都花上布（價格同上）なり、次は明石縮（五圓より六圓五十錢）次は越後透屋（二圓八十錢より四圓）次は米透屋（價格同上）なり、流行の柄と色とは淡お納戸、淡鼠、利久鼠、壁鼠、千歳茶に微塵崩し、木賊、簾瓦崩し、萬筋、一の字繋ぎ等なり、妙齢の人に向ひては同く淡色地最も流行なり、



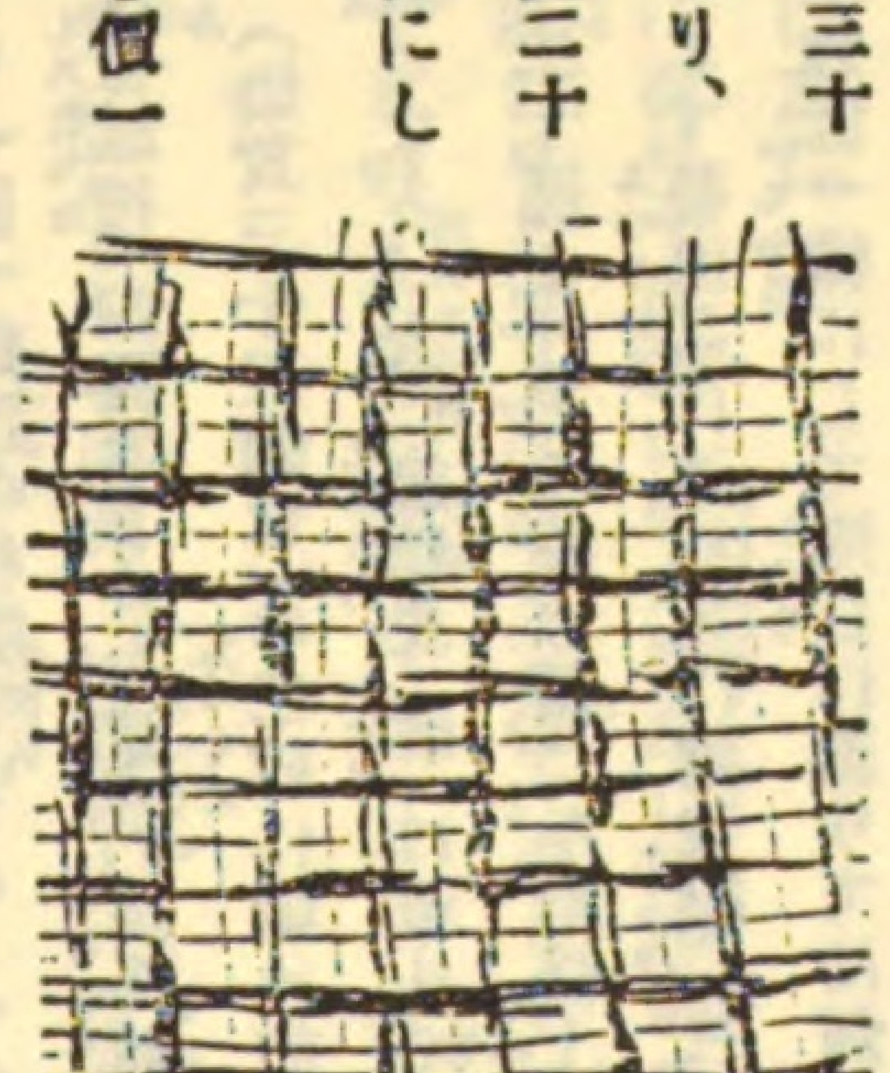
絣——前記の地色に縞絣、飛絣、左の字絣、キの字絣、井桁絣及十字絣等にして紺地絣は全く廢りぬ、

平民的帷子——九重上布これは昨年の新工夫にして本年より賣り始む、地質は麻にして其柄に至りては奇々妙々、九重とはいへど雲の上の流行にあらず、最も平民的なり、價は一圓二十錢より一圓三十五錢（女向）、



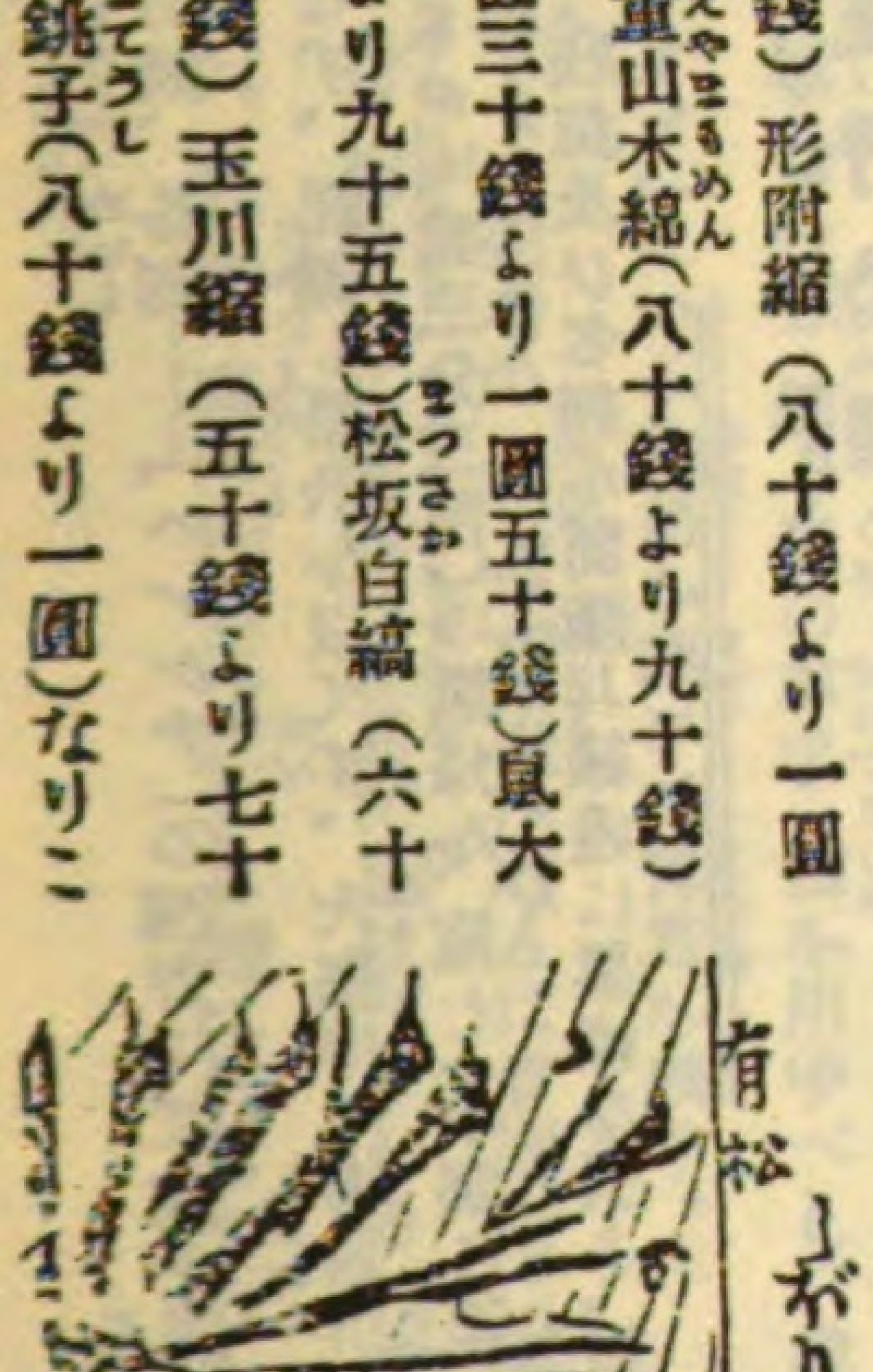
男物には八重山上布（一圓三十錢より一圓五十錢）最も可なり、越後の錆縞之に亞ぐ、價二圓二十錢より二圓八十錢まで、孰れにしても平民的流行なり、

瓦斯絽も帷子の代用となる價一圓四十五錢なり、



浴衣地——其流行の第一は前號の紙上にも紹介したるが如く、婦人向には瀧川縮緬（一圓八十錢）なり、品は高尚にして光線の射映美にして頗る精巧の出來なり、恪様によりては本場お召縮緬も三舍を避くべし、是も隨分平民的浴衣にして可なるべし、

次は瓦斯糸白縞（八十錢方一圓）次は白薩摩（一圓二十錢より一圓五十錢）白大和（四十錢より一圓十錢）晒縞（四十錢より六十五錢）白絞り（五十五錢より七十五錢）形附木綿（五十錢より八十錢）同白地珍柄（九十錢より一圓二十錢）形附縮（八十錢より一圓三十錢）八重山木綿（八十錢より九十錢）鼠薩摩（一圓三十錢より一圓五十錢）鼠大和（八十錢より九十五錢）松坂白縞（六十錢より七十錢）玉川縮（五十錢より七十五錢）白縞銚子（八十錢より一圓）なりこれは男女混淆したるものと知り玉へ、

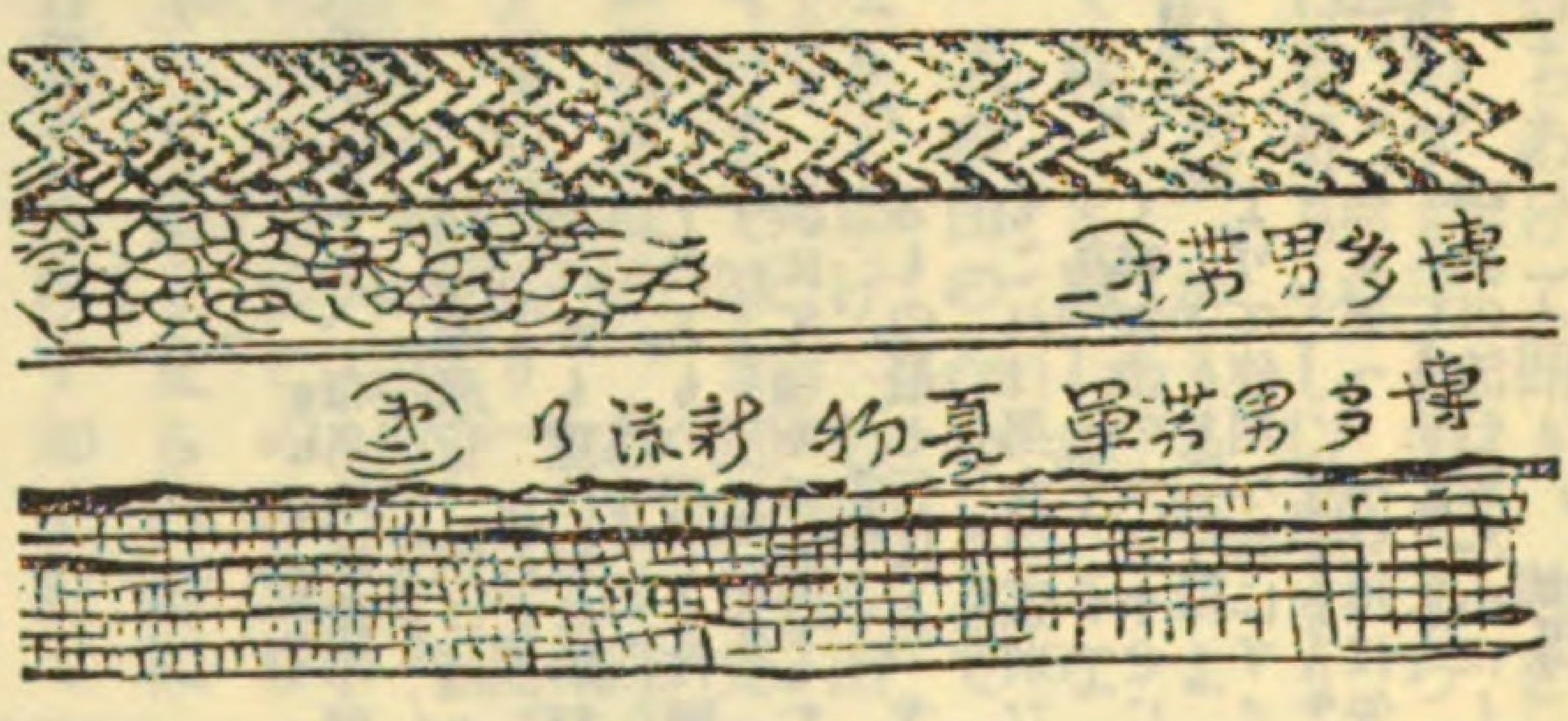


單衣地——年の序に之をも記して前號を補ふべし、第一は瓦斯絲結城一圓二十錢より二圓二十錢)本薩摩(二圓より四圓五十錢)一本絣(八十錢より一圓二十錢)紺大和(一圓二十錢より一圓五十錢)久留米絣(一圓三十錢より一圓八十錢)有松紺絞り(九十錢より一圓三十錢)博多紺絞り(一圓五十錢より二圓五十錢)本場結城(一圓五十錢より二圓)青梅縞(一圓八十錢より二圓)結城木綿(八十錢より一圓)紅梅織(二圓五十錢より三圓)等、

男女の夏帶

男帶——博多は相變らず流行、色合は淡茶、紺、お納戸等にして種々珍奇の柄を織り出す、近來八王子製にて三巾に織出すもの行はる巾は曲尺五寸(代價五六圓より七圓半)、昨年は眞田の一重帶流行せしが、本年は博多一重帶(三圓内外)最流行、淡茶、淡淺黄、淡お納戸最も佳なり、

女帶——丸帶ならば例の繻珍、色は淺茶、肉色、淡鼠、新淺黄等の淡色最も流行し、柄は綸棣に詳なり、博多も同樣淡色を好み鳩羽色淡淺黄等人意に適し、繻子、小柳も之に次きて行はる、







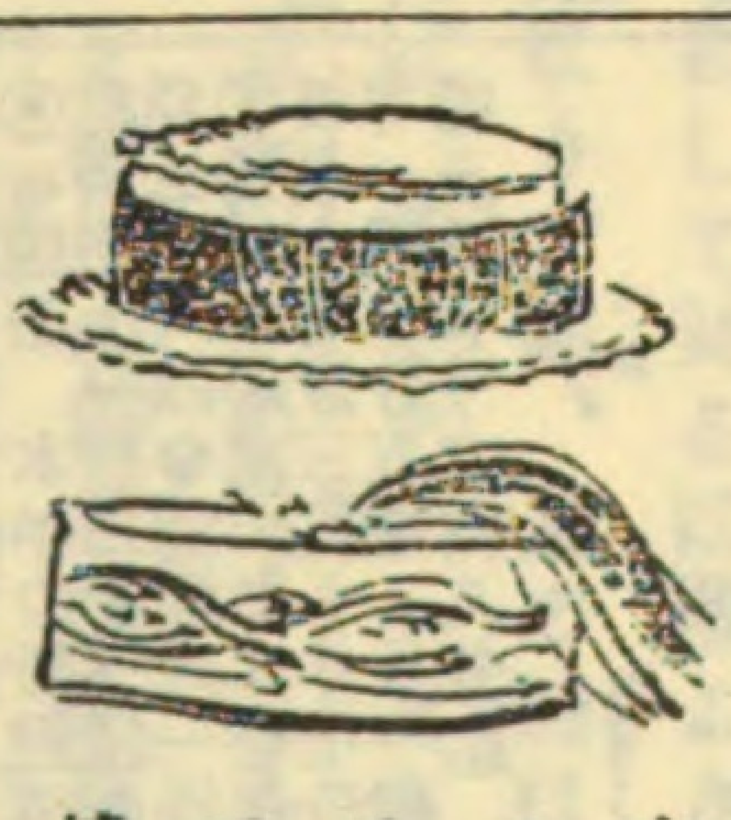
可憐の花

他にあらず少女の頭上に咲く花簪なり、今月より流行せるは、紫陽花、夏菊、朝顔、酸漿、美人草等、葡萄、胡瓜、茄子も行はる、併しこれは八百屋向のみならず、一般の流行さ知り玉へ、

ツマミ楠玉鎖紋下りは追々さ精巧の品顯はれ甚だ人の嗜好に適す、

ツマミ針打も行はる、

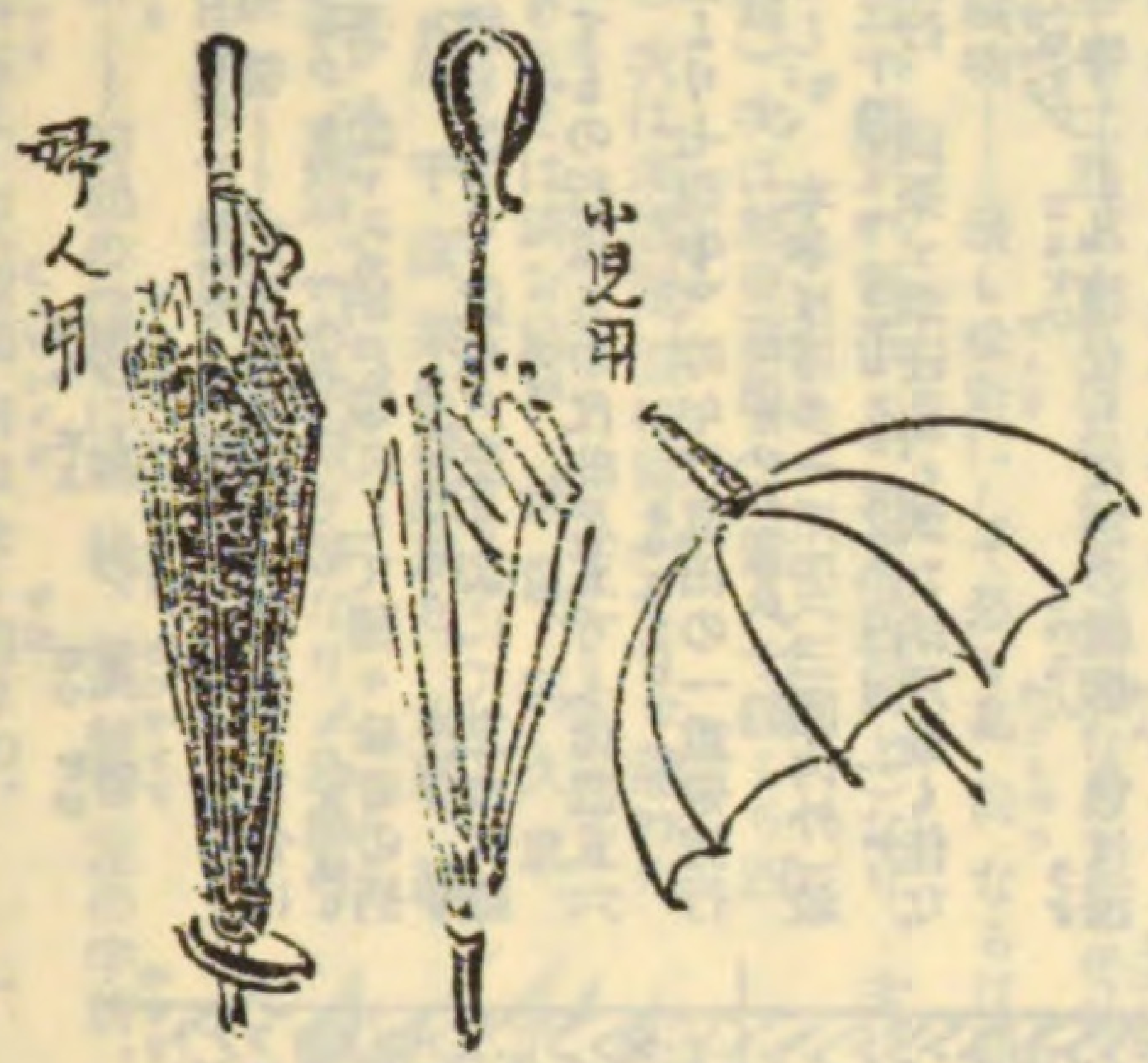
流行の夏帽子



本年の流行麥藁帽子は山高からず縁最も狭く且つ荒編の方なり、鉢卷は白又は淡茶の「リボン」にて、ワザと皺を寄せしものを金石のボタンにて止めたるもの最も流行なり、之に亞くものは縞「セル」の鳥打帽子(前に皺をよせしもの)なり、次は圖の如き薄羅紗にて土耳其帽子に似て

丈低く其縁邊に唐草等の模様あるもの流行す、

蝙蝠傘



圖の如く傘は丸味、柄は長き方、ホ子は八本のパテン、布帛地は綾甲裂絹等最流行、柄は種々あれども重に角に彫刻したるもの若しくは護謨にて種々に形造したるもの最も行はる、尤もこれは男女の區別なく唯だ傘の大さ小さによりて使用を異にすさ知り玉へ、小兒用は矢張右の流行形を小にしたるもの、傘の周圍に房を附したるものは少しくすたれり、南傳馬町坂本洋傘店に於て頗る珍奇の洋傘を賣捌く、

日用品物價（六月十日）

◉白米小賣相場（一圓に付）●一等白米九升七合●二等白米一斗●三等白米一斗五合●四等白米一斗一升一合●五等白米一斗一升八合

◉鹽　雨天續等にて前號より一層上進せり小賣も同斷（一圓に付）●赤穗三俵五分五厘●大鹽三俵六分●本齋五俵七分●新齋六俵六分

◉鰹節　本年の新鰹節は餘り氣配立しからず左に（一貫目に付）●房總新節上一圓二十五錢●同中一圓十五錢●同下一圓十錢●駿州新節並一圓三十八錢●陸奥大一圓五十三錢●同小一圓十一錢

◉醬油の商況　別に變動なき商況なり其相場は左の如し（一圓に付）●上●最上七分三厘より七分九厘迄●極上八分七厘より一樽一分三厘迄●上等一樽三分五厘より一樽六分迄●中物一樽九分より二樽一分迄●並物二樽三分より二樽八分迄

雜録

遺珠顆々

○勉强の得る所注意は之を貯ふ、假令其業務に勉勵するも著く注意せざれば一手之を集めて一手之を散すに齊しきなり　ゴルトン

我等は年に生きずして事業に生き、呼吸に生きずして思想に生き、時計の數字に生きずして感情に生く、我等は心臟の鼓動を以て生涯を數ふ可きなり、尤も多く考へ尤も高く感じ尤も良く行ふ者こそ即ち尤も長生するものなれ　ベーレー

摸倣は自殺なり嫉妬は愚昧なり　エマアソン

親切なる言を云ふべき機會を失ふなかれ昔の人が吾田地に空地あるを見る毎にポッケツトより檞種一粒取り出でゝ之を掘り植へし如く汝も亦一生の間親切の言を用ふるの機會を失ふなかれ檞種は何の價もなきものなり然れども非常の大木と生ひ立つこともあるなり　サッカレー

家庭小話

其六　布哇出稼

源二は布哇出稼を思ひ立ちぬ。或る夜の事、たそがれどきより山田の家を出で、深更に及びて歸り來り、其の夜は眠らず、物案じに鷄のなくさへ氣付かざりき。されど斷然實行するとに思ひ定めぬ。

明けての日、此の志を主人に打ちあけて語り、許を乞ひける。山田の主人みなまできかず、手を拍てよろこび『よくぞ思ひ立ちしぞ。實は自分も少し以前より氣付きて、すゝめてもみんかと思ひしが、かゝる事はよく／＼の大事ゆへ自ら思ひ立たでは、と默しぬ。さなり、さなり、男一匹いつまでか、人の田のみせゝりてやむ可き。最早や汝も奮發どきなり。ゆけ、われも出來る丈け世話す可し』。源二は『今日まで厚き御恩を受け乍ら、此の如き事申出で、私が居らねば、あとは御迷惑とは知り乍ら、まことに相すまぬ儀なり』と今更らわびる如く言へば、主人『それはいらぬ遠慮なり、汝を今日まで世話したるもたゞ吾家の奴僕とのみ思ひはせじ、汝も立派な男一人、何卒して獨り立ちの者に致し度きは吾が始よりの願なり、前にも申す如くすゝめても出し度き處、自ら思ひ立ちしは吾に取りて反て喜ばし』。かく迄で親切なる主人世になしと源二が常に言ふも無理ならぬ事にこそ。

そも源二は賴るべなき少年なりしを餘程以前に山田の主人之れを不憫に思ひ、引取りて家の男となし情をかけて使ひければ、源二も亦た壯健の體と忠實の心とをさゝげて働きける、されば源二と云へば誰も山田の家族と思ひし也。

其の夕、源二氣嫌よく昂然として胸を打て曰く『已に御主人も許されたり、此のからだ一つあらば布哇は愚か何處までも押し渡る可し、三斗俵一つあれば二ヶ月は支ゆ可く、十二弗半の給料すくなくも月に半分は餘る、之を三年に見積らば二百餘弗、先づ二百餘圓、甘し／＼、其より亞米利加に四五年も稼ば千圓の金を懷にして歸るは夢よりも確ならん。さて歸國の後は、さなり、鶴、其の時は己れの奧樣は承知か』と言ひ放てば、皆々ドット吹き出しける。

愈々出立の前一夜となりければ、離別の莚、門出の祝を兼て山田の奧坐敷に心計りの小宴開かれぬ。

宴は終りたれど、話のみは次第に榮りゆくなり、布哇

の事、亞米利加出稼メキシコ出稼、北海道移住の事、或は支那人の話、難船、厄病、又たは國人の風儀の惡しき事などいつはつ可くも見へざりける。婦人達はいふ『隨分達者に稼ぎ、早く歸られよ』と。太郎は叫ぶ、『何に、決してオメ〳〵歸るな、日本人の肝玉を見せよ、支那人でも、歐羅巴人でも蹴飛ばす可し』。主人は『否な〳〵、決して血氣にはやりそ、忍耐の上にも忍耐を加へ、惡しき風儀などに決して染まぬ樣、御國の恥を來さぬ事こそ第一なれ、同胞の者に病める者などあらば親切に世話せよ、亂暴は野蠻なり』と戒むれば、源二はたゞ鐵の如き腕をこすりて『なに、これさへあらば、何に、これさへあらば』といふのみ。

さて談話もつきいざ然らば各々やすむ可しといふ時、細君紙包み取り出し源二の前に置き、『此の内に五十圓あり、之を此の度のはなむけと致さん、と言へば驚かんが、實は御身が吾が家に來しり時より御主人と相談して、御身よな〳〵のよなべの草鞋、繩、草履などは、わが家に用ゆれど、皆御身より買ひ取りし躰になし、其の他米搗の代も御身の所得となして積み置きたり、之れ御身が獨り立ちの節を思ひしなり。積れば大金となる者かな、茲に四十三圓五十錢となりぬ、されば此は御身の金なり、それに六圓五十錢を添へて丁度五十金、六圓五十錢は己れらが志なり、之れを身に用意して出でられよ萬一の時少しにても用意なくては外國にては困る可し。若し又た御身の其の御自慢の腕にて之れを資金となし、向にて一商法やられても宜し、兎も角も之は取り置かれよ』と言はれて、源二少暫は物も得言はず。

談叢

樂しき饗筵

儉素は百の善行を生み、驕奢は百の非行を生むべし。

古より國として儉素を以て起り驕奢を以て滅びざるはなく、家として儉素を以て榮へ驕奢を以て衰へざるはあらぬなり。

江戸第一世將軍が極めて儉素なりし事は人の知る所なるが、其感化は大奥にも及びて、婦人女子も能く此の意を躰するもの多かりしぞ尊とき。第二世將軍の乳媼を大婆といへり。婆は姓字を知らず、

大奥中之を尊んで唯斯くは稱しゝなり。婆既に貴きに及び、資用裕に、侍婢十數人ありて、將軍の之を待つことも極めて厚かりしに、彼女は毎月例として一二回づゝ一種の饗莚を開きぬ。莚に客たるものは中間小者轎夫に至るまで數十百人なり。飯を大なる盤に入れて、彼女手から之を盛り、歡笑嘻々、甲斐〳〵しく其間に周旋しつゝ、彼女は以て一世の樂事となしぬ。

一日莚開かれて笑語正に闌なるの時、執政本多佐渡守正信來り過りぬ。彼は之を見て驚て曰く、『君の御覺えも淺からずして侍婢どもも數多ある身の、斯く輕〳〵しくしたまふは何事に候ぞ』と。大婆手に持ちたりし杓子を置き、且つ言へるやう、『人の近頃御身が驕りたまふよしを申すものゝありたれど、老婆は信と思はざりしに、さては虚言にてはあらざりけるよ。老婆は本參河の貧しき家のもの、五人六人の客を邀ふる事さへ叶はで、常に悲しく思ひしを、今は君の厚恩に浴し、幾百人を振舞ふても餘りある身となりたれば、昔を思ひて斯くはするなり。中間小者など招くは本を忘れざらんが爲めのみ。然るに御身は早彌八郎(正信の舊名)とて鷹かひし時の事をば打忘れ、其心にて一國の政治をしたまはん事いとも危きわざならずや』と。

流石は執政佐渡守も、且つは愧ぢつ、且つは感じつ、よきやうに語りて罷り出でにき。

野の花

今は昔天明の頃の事かとよ、大和國高市郡觀音寺村に貧しき農夫のありける、名は佐兵衞。

彼は律義なる農民として妻と共に耕し、貧き中に四人の娘をはごくみ來りしが、彼は年頃眼を病みて、其一眼は遂に復た可愛ゆき妻子をも見ずなりぬ。而して其殘れる一眼さへおぼろに霞みて野山の色もさやかならざりき。

唯にこれのみにはあらざりしなり。彼は又中風といへるを病みき。彼の手足は遂に彼自らを必ずしも徹頭徹尾彼の命令を奉ずべき義務あるものにはあらずと主張するに至りぬ。

娘四人、姉は小ゆり。

彼女は其一眼にして中風に罹れる父と、生平多病なる母とを、安く生活せしむべきすべにもがなと彼女の良人を迎へぬ。然れども徒爲なりき。彼女の良人は未だ歳の半をも彼女の家に過さずして忽ちに辭し去りぬ。」

彼女は謂ひき、『斯くては父の意に叶ふべきものゝあるべからず、他人の入り來りて老たる人に心づかひさせんこそ世にも心苦しきわざなれ、我は友なふして我が世を終ふべし』と。彼女は不幸なる父と手弱き母とを熟視して、爲に自家の幸福を犠牲にせざるに忍びざりき。

彼女は決心せり、『再び良人を迎へじ』と、而して健氣にも『其双手を以て彼等を幸福ならしむべし』と。

乃ち中の二人の妹をば他に嫁がしめぬ、而して末の妹くにと共に心靜に其二親を養ひき。

既にして彼女の父は其禍に僅に取殘されたる一眼をも今は再び病の爲に奪ひ去られぬ。不幸にして彼は更に一個の眼をも有たざる貧者となりしなり。彼は是より其己れの家の中さへ他の人なしには行き得ざりき、其起にも、其座するにも、或は其厠へ行くにさへも。

彼は其厠に行かんと欲する時は、彼女等の方に仕事にあるを思ひて先づ其妻を喚びき。而して多病なる彼の妻が未だ起ち能はざる前に、若き二人の手は早く已に老たる彼が左右に在るを常となしぬ。

彼女等は日毎に交る〴〵出でゝ其田を耕しき。而して一年三百又六旬日、家に孤坐するの外、復た他に一の變化せる生涯を有たぬ其父を慰めんが爲には、彼女等は屡〻歸て茶を煖めぬ、物をすゝめぬ。此くして又田に、又家に。

晝は終日、夜は終夜。

塒に皈る村烏の彼方に飛ていざあと誘へば、鍬を手にせる彼女等は里人と共に家路にとたどりき。而して其父と母とに夕食をすゝめ、夜かう〳〵と更け行けば、父と母が僅に睡に入を見て、彼女等は苧をうみつ、絲を繰つ。

苧をうみつ、絲を繰りつ、彼女等は之を賣り將ち去て、其父と母とを喜ばさんが爲めの珍らしき或ものに代へき。其他に出でゝ哀れなる家づとを待ちわびたる父の

手の上に置くの時、目しゐなる父が之をさぐりて微笑むを見るが如き、如何に彼女等の純潔なる喜びを動かせしぞ。

彼女等の父は其齢のかたぶきて後は、寒き頃に晝夜火にのみあたり居て、冬の初より卯月の頃まで門邊にも出でざりき。たま〳〵空暖かき日に逢へば草履をつくり繩をなひなど手すさみし、以て其無聊を消しけるが、二人は『父の手づから作りたまへるはもつたいなし』とて其母にのみはかせ、繩はおさめ置きて年毎の貢の料とはなしける。父失せて後も物を尋ねなどして其繩のはからず彼女の手の上に落ちし時は、里人の誰やらん無言なる彼女の眼に一種の露の湛へぬるを見き。

一歳卯月の空新たに霽れていと心地よき日のありけるが、彼女等の父は辛苦の鍬を把りて半生の間慣れそめにし其昔の田の面を憶ひ出でつゝ『今日は心も長閑やかなり、久しく田の面にも行かざれば、あはれ此世の思ひ出に行きて見まほしく思ふぞ』と語りき。二人の娘は『去らば』とて、交る〳〵父を背負ひ、母をもいたはり伴ひ行きて、田のくろに腰打掛けさせ、緑りの風涼しき景色を見渡しつゝ、高くさへづる雲雀を聴き、其邊りの物語りなどして、あやしの割子やうの物をとり出で二親に飯をすゝめき。此時世にも嬉しげに打語れる彼女等は、如何に此のすが〳〵しき風景に對して、看て見ざる其父を心の中に泣きたりしぞ。初め負ひ行かれて緑りの草におろされし父が、其四肢の心のまゝならずしてよろぼひながら雨後の土の乾かぬに其手の跡を止めしを、天明元年七十九歳を以て二人の最も愛且敬しつる彼が安けき永き眠りに就きし後も、其の形見の痕跡は草とり除かれて小さき竹の植ち居りしぞいとも哀れなりき。

彼女等の母も此時亦年七十九なりしが、彼女は其後二人の娘の爲に猶幾年かの安き生涯を延ばしける。冬の夜寒のをしあけ方に夜の物とて足らぬ老の身の、二女が打着せぬる夏衣に相愛の情温かに睡りたりしは幾夜ぞや。

斯く獻身的の愛を不幸なる其父母に捧たる彼女等は、

ア、終に嫁せずして其世を畢へぬ。彼女等の終生の幸福は唯其痛はしき父母の一片の笑顔なりき。

繪畫

無聲詩話（一）

繪畫の用は極めて多く一々數ふるにも及ばぬ事なり。中にも人の氣品を養ひ、性情を高め、室内を装飾して子女教育の不言の教師となすなどは、世の多く氣付かざる所にして大に力あるものなり。又生兒の容姿は懐胎中に母の最も多く接しぬるものに似る迚、美人畵英雄畵を以て母の居室を飾るものもあるなり。去れば繪畫は自ら畫き得るものは言ふまでもあらず、自ら畫き得ざれば迚、美想の教育上何人も多少心得居らねばならぬ事なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

繪畫は第一に實景を寫すを主とす、口舌の形容し能はぬ所詩文の記述し能はぬ所唯繪畫之を説明し得べし。とは繪畫を實用的に見て其効用を擧げしものにて、泰西の繪畫は重きを是におきて發達したるものなり。去れども更に一歩を進めて之を美術的の眼より見る時は、別に神韻なるもの丶大に貴ぶべきあり。日本古來の繪畫は寧ろ此方面に向て少からぬ發達をなしき。



吳道子筆楊柳觀音圖　金澤田昌綱臨

蓋し日本畫は其初支那の筆法を傳へしものにて、支那畫を祖とし、而して更に幾多の日本美想を加へしものなり。然るに支那畫は一方に院躰（畫院の畫師風）とて畫師の畫も大に發達したれども、他方には所謂文人畫なるものありて、此の畫人は皆詩人なるにより、神韻を主として、餘情を尙ひ、他の院躰をば俗氣ありとして之を卑しみぬ。彼等の多くは實に一世の名士にして天下の推重する所なりければ、文人畫意は久しく支那畫の精神となりき。之が餘風の承けたる日本畫の、同しく神韻を尙びしも理りならずや。



眞を寫すは繪畫の天職、神韻あるは美術の精神、もと一を取て一を捨て難し。然れども形を寫して眞境に入れば神其中に在るなり、神を畫て能く神なれば形其中に在るなり。

支那にては、宋の頃より試驗を以て畫師を登用するに詩騷の句などを題として畫かしめしが、是等は實に文人畫意の世上に採用せられたる證據にして、爲に繪畫の天職たる寫眞の意を忘れしめし弊はなきにしもあらざりしが、因て以て畫家の氣品を養ひし功も亦少々にはあらざりき。例之ば、『踏花歸去馬蹄香』の意を畫きて、馬蹄に蝶を添へし如き、忽ち詩人の版圖に入りて能く香の字

の意義を畫き、從て踏花歸去の意も顯然たるにあらずや。『行鎖橋邊賣酒家』に、竹林上唯酒帘を畫ける如き、行鎖の字躍若として動くにあらずや。或は『嫩緑枝頭紅一點、惱人春色不須多』の二句を畫きて、危亭の外綠柳映し、欄に停て偏に美人の立姿を見るが如き、解悟の花の意知らるゝにあらずや。

是等は能く畫家をして俗氣を去らしむると共に、觀るものも亦自ら氣品を養ふへし。盖し此等は畫にして亦能く詩なるもの歟。

此くの如くして日本畫の師法となりたる支那畫は、支那畫は黃帝の時初まれるよし傳ふ。而して其初は文字と同一物にして、其次第に粗密詳略の差より、相分れし事は、象形文字を見ても明かなる事なり。其最も早く發達したる人物道釋畫は、漢の世魏の世の頃より巧みなる人多く、後は宋の李龍眠など最も名高かりき。李名は公鱗字は伯時龍眠山に老しぬ。

古は皆大着色なりしもの、唐の呉道元より中彩色を始めき。うすさいしきは陳鑑より始まり、減筆とて艸々に畫くは梁楷より出づと云ふ。又白描とて細筆に畫きて、色を用ゐぬもあり。

（接後）

音樂

僊華琴

僊華、四竈訥治

第四、樂曲

僊華琴を以て東西兩洋の樂曲を彈ずるに便なるは前述したるが如し。今其調子感所幷に西洋の樂曲につきて試彈したるもの一二を擧げて例證せん。

（ハ）調の感所

(ト)	(ニ)	(イ)	(ホ)
5	2	6	3
			i
6	3	7	
	4	i	5
7			
1	5	2	6

君が代

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで。

(ハ)調　君が代

2 1 2 3	5 3 2 —	3 5 6 5 6	2 7 6 5
き み が ー	よ ー は ー	ち よ に ー	や ち よ に
3 5 6 —	2 1 2 —	3 5 6 5	3. 5 2 —
さ ざ れ ー	い し の ー	い は ほ と	な り て ー
6 1 2 —	1 2 6 5	6 5 3 2 — ‖	
こ け の ー	む ー す ー	ま ー で ー	

(ヘ)調　元　冠

4/2

5. 5 1 —	3 2 1 3	5. 5 2 2 2	3 1	5 3 2 1
し ひゃ く ー	よ し う を	こ ぞ る じ う	ま ん	よ き の て
2 — 2 o	5. 5 1 —	3 2 1 7	6 —	2 3 2 1 2
き ー ー	こ く な ん	と こ に み	る ー	こ う ー あ ん
5. 1	2. 5	1 —	1 0 ‖	
な つ	の こ	ろ ー	ー	

元冠(軍歌)　　入鋼樂士作曲

(一)鎌倉男兒

四百餘州を擧る、十萬餘騎の敵、國難爰に見る、弘安四年夏の頃、何の恐れん我に、鎌倉男兒あり、正義武斷の名、一喝して世に示す。

(二)多々良濱

多々良濱邊の戎夷、ソハ何蒙古勢、傲慢無禮者、倶に天を戴かず、イデヤ進みて忠義に、鍛へし我が腕、ここぞ國の爲め、日本刀を試し見ん。

(三)筑紫の海

心筑紫の海に、波押し分て行く、大丈夫の身、冠を討ちかへらずは、死して護國の鬼と、誓ひし箱崎の神ぞ知召す、大和魂潔よし。

(四)玄海灘

天は怒り海は、逆巻大浪に、國に冠をなす、十餘萬の蒙古勢は、底の藻屑と消へて、殘るは只三個、いつしか雲霽れて、玄海灘月清し。

(ヘ)調の感所

(ト)	(ニ)	(イ)	(ホ)
2.		8	7
	6	4	i
3.			
4.	7	5	2
	1		
5.		6	3
	2		#

忠臣

（一）調

4/4 | 1 1 2 2 | 6 6 6 6 | 2 2 2. 1 | 2 ー・○ |
かさぎの | やーまを | いでしよ | りー、

| 1 1. 2 2 | 3 3 5 3 | 2 2 2 1 | 2 ー・○ |
さーして | ゆくへは | さだめな | きー、

| 6 6 6 6 | 6 6 5 8 | 6 6 5 6 | 2 2 6 5 |
きーみを | やすむる | いさをし | はーーー

| 3 3 5 5 | 6 6 5 3 | 2 2 2 1 | 2 ー・○ |
みーなと | がはにぞ | のこれけ | るー、

忠臣の歌

仙花配曲

（正成）笠置の山を出しより、さして行衛は定めなき、君をやすむる績は、湊川にぞ殘りける。

（正行）國の爲とて大丈夫が、四條畷に散る花は、櫻井驛の誡を、守りて香はし菊の花。

（高德）春の彌生に夜をこめて、君に告んとますらをが、大和心を櫻木に、殘せし跡こそ匂ひけれ。

（長年）よるべも浪の荒磯を、船上山にとゞめてし、君が心に忘られぬ、忠義は山より猶高き。

（義貞）雨や霰と亂れ射る、矢面にたちて只ひとり、らなびまわやなす、二ふりの劍に輝く忠と勇。

東洋亞細亞

（へ）調

4/4 2/4 | 3 4 3 | 3 6 4 3 | 1 3 6 4 | 3. 2 | 3 3 7 2 | 3. 0 |
どうよ | あじあの | だいにほ | んー | ていこく | は

| 3 3 2 | 3 3 6 4 | 3 4 3 1 | 7 1 7. | 6 7 6 4 3 |
くにの | ながさも | ごひやく | よりその | じんーこう

| 6 6 7 7 | 0 4 3. 1 | 7. 2 | 3 4 4 | 3 6 4 | 3 ‖
さんぜん | 〻ひやー | 〻まん | ララ | ララララ | ラ

東洋亞細亞

仙花作歌撰曲

（一）東洋亞細亞の大日本帝國は、國の長さも五百餘里、其人口三千九百萬、ララーララ ララ。

（二）國の產物數多くある中に、米や生糸や織物茶、又漆の細工に名も高き、ララーラ ララ。

（三）名ある都は三つあり算れば、東京京都府大坂府、此三府は何れも賑かし、ララララ ララ。

(四)賑ふ港は五港あり横濱に、神戸や長崎新潟や、
又函館景色の其よさは、ララァーラララ。

(五)景色よいのは陸前の松島に、丹後の天の橋立や、
又眺も安藝の嚴島、ララァーラララ。

時事一斑

皇后陛下の蠶事

皇后陛下は、正に宮中に養蠶所を設けさせ、女官を相手に手づから桑とりて蠶兒を飼はせ給ふと聞く。天照太神は親ら織れり。雄略皇后は手から桑とれり。我が皇家の皇家たる所以、實に是にましますなり。

東京慈惠病院行啓

去月十八日には、皇后陛下東京慈惠病院に行啓し、看護婦卒業式に臨み給ひぬ。此の榮譽なる式場にて卒業證を得し人々は、

第八回卒業生　立花濱、岡本孝、星登與
第七回卒業生　石井きよ、小林みつ、東角井愛、山本錬、小久保ふさ

寺島宗則伯歿す

六月六日樞密顧問寺島宗則伯歿せり、時代は亦一個の人物を社會の舞臺より推し落しぬ。噫。

吾妻岳破裂

福島縣なる吾妻岳は破裂せり。之が取調の爲め再び派遣せられし技師三浦宗次郎西山惣吉二氏は、爲に七日を以て無殘の最後を遂げたり。恰も勇士が戰場に死せる如くに、其職に死せり。

北征の短艇

郡司大尉の一行は、去月廿八日陸奥國八戸の海上に於て暴風に逢ひ、死者あり、廿九日大尉も亦負傷したり。

髯公踊る

虎の門、鷲の館、宴開かれて賤婦侍し、髯公踊りて衆賓笑へり。嗟乎、汝國民の躰面を奈何。

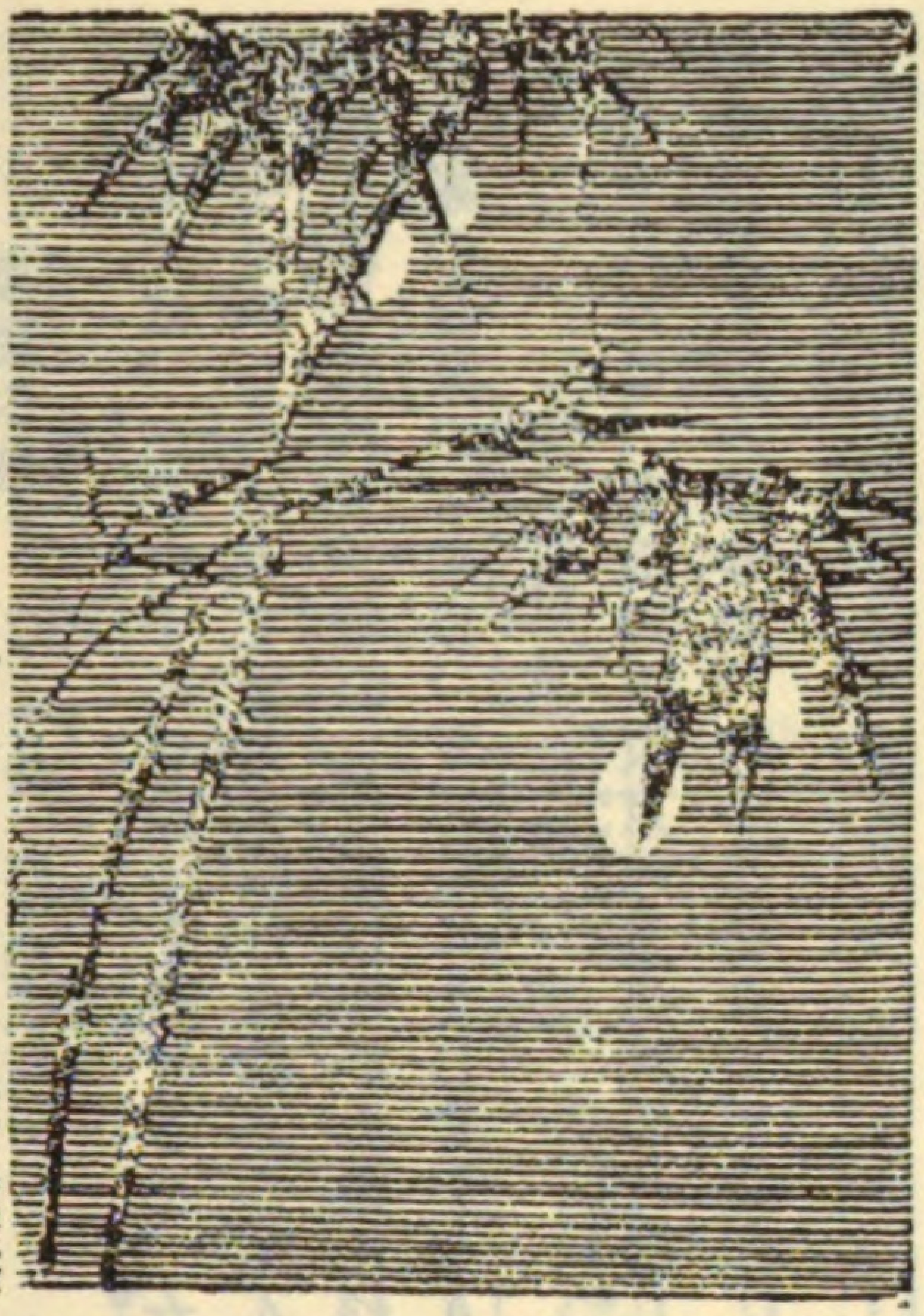
行樂

都下六月の樂みは、まづ筆把りて杜若かきわきて見んに、向島秋葉、木下川藥師境內、根津神社境内などなるべし。花菖蒲は、推す廣尾の咲花園、向島の百花園、名にし負ふ堀切、龜戸祠、本所松倉町の借春園。

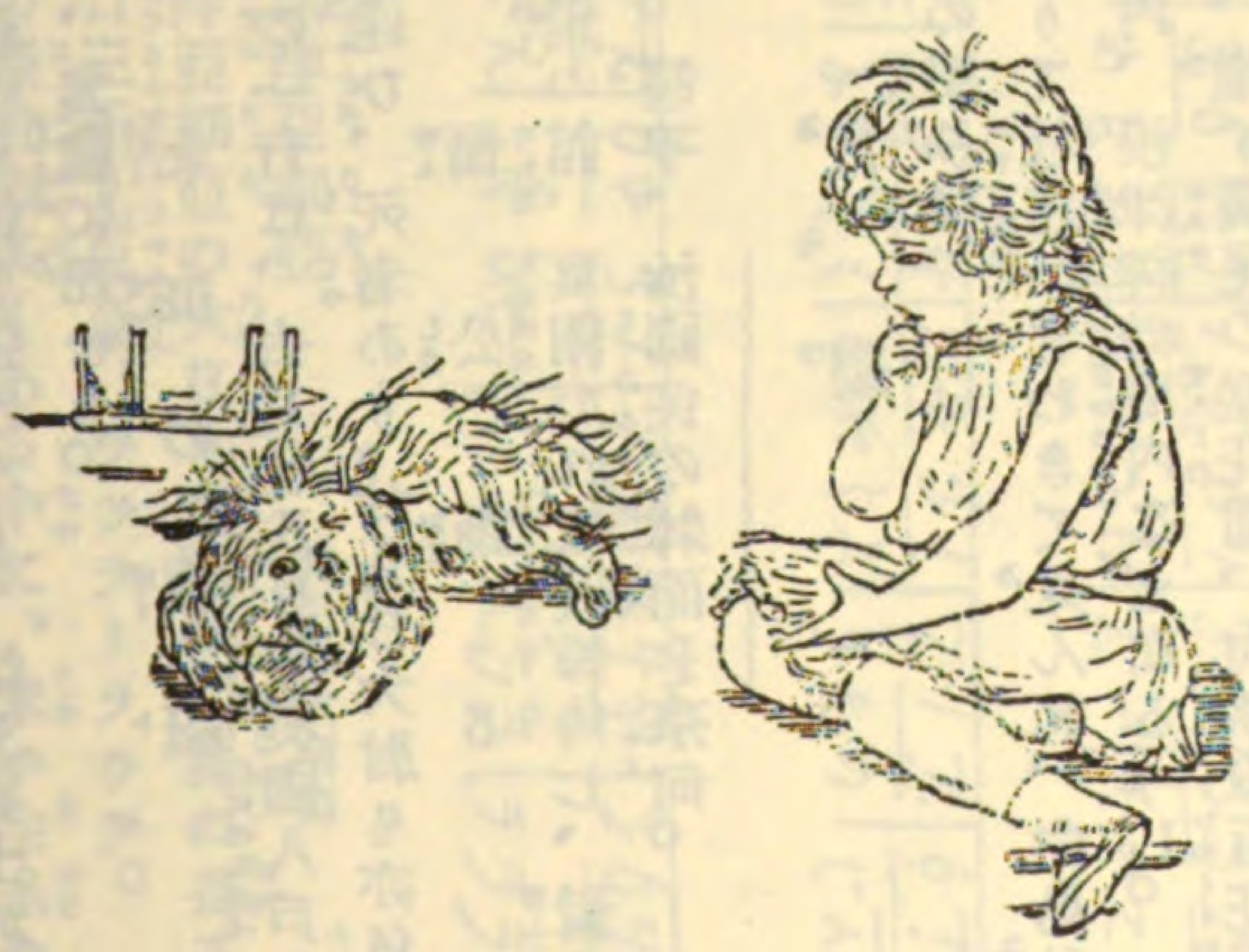
『うちしめりあやめぞかほる、郭公啼くや五月の雨の夕暮』。

而して向島の長春園、請地村の東花園、百樹園等に到

らば、如何に美はしく薔薇の咲くよ、如何に芳はしく匂ひの散るよ。聚りては花の亂るゝが如く、散りては星のゆらぐに似、落ちては葦の葉蔭に見隱れする漁火と覺ほしき螢は、

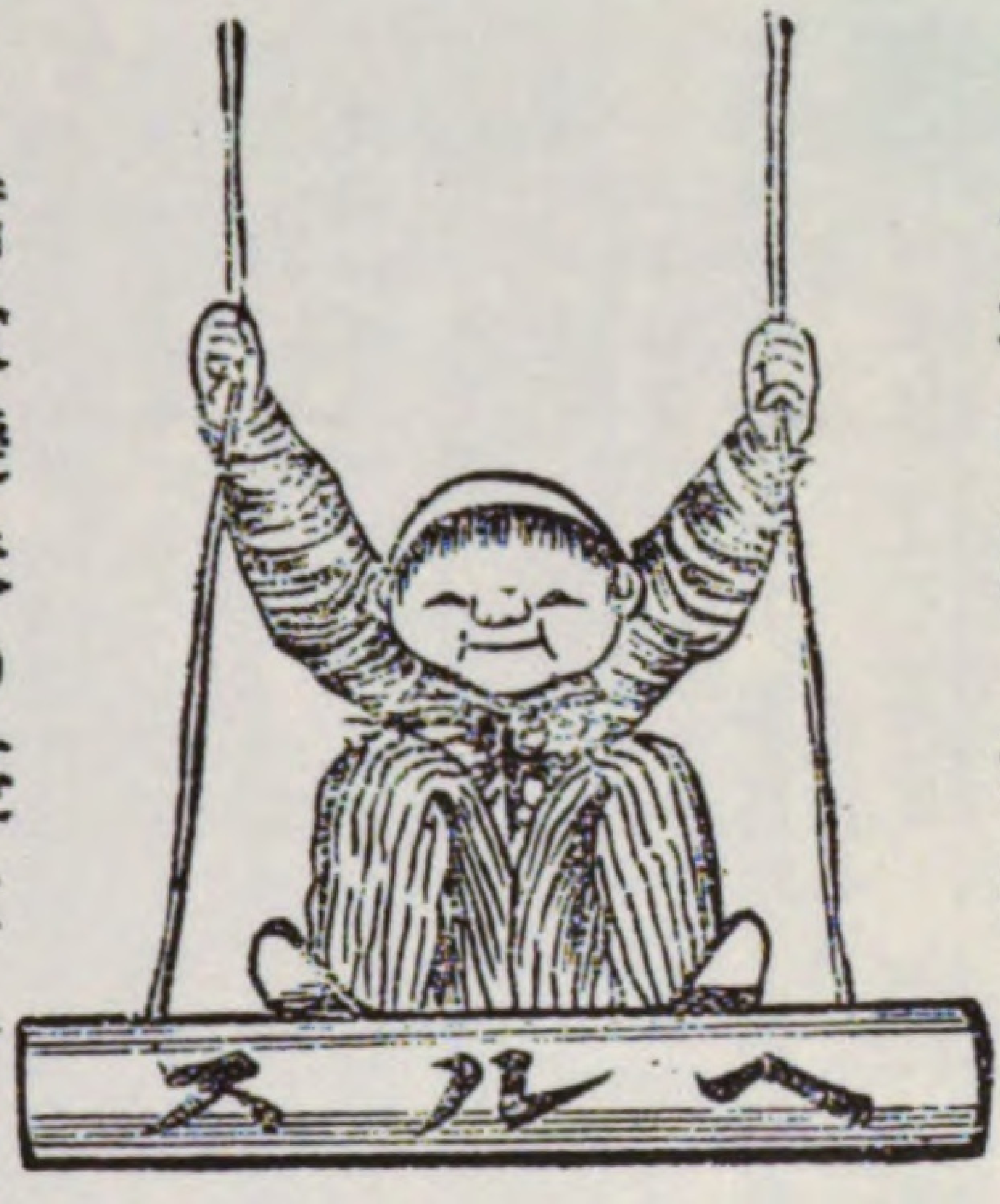


既に其處是處の夜を飛廻りぬ、觀ん人は去ねかし、目黒に、江戸川に、飛鳥山に、谷中、螢澤に、淺草田甫押上堤に、若くは遠く大宮に。或は今戸、小梅村、平井聖天、佃島近傍、砂村等に到りて水鷄を聽くも一興ならん。雨の夜毎にほと〳〵と戸を敲く聲。實に『槇の戸をたゝけばやがて明くる夜の、くひなは人をはからざりけり』。



牛乳に勝る滋養品

腐敗變味の憂なし



「ヘルス」は美麗堅牢の鑵詰にして殊に佳良香味を有し攜帶に便なれば日々の保養飲料は勿論陸海軍用旅行航海料等には頗る適當なり且高尚なる進呈品によろし●「ヘルス」は日本全國有名なる賣藥店洋酒店鑵詰屋等にて販賣せり

ヘルスは賣藥に非す取次をなすに面倒なし未だ取次なき所は至急申込あれ規則書を送附すべし

ヘルス販賣所は全國至る所にあり

ヘルス

六合分（十六錢 郵稅二錢）
一升二合分（廿八錢 郵稅二錢）
三升分（六十五錢 郵稅四錢）
六升分（一圓廿錢 郵稅八錢）

●効能
身體の薄弱なる人、過度に精神を勞する人、婦人産前産後、記臆力の弱き人、忍耐力の乏しき人、氣力減乏、貧血諸症、諸病の衰弱、過淫より來る衰弱、後の快復期等に効顯著なり又肺病胃病患者には最良の滋養飲料たるとは諸大醫の實驗證明せらるゝ所なり

東京市内は配達す
●郵券代用は一割增
●遠國御注文の節代金は爲替にて三井銀行或は神田郵便局に振込あれ

東京神田鍛冶町（大通）
（電話千八十二番）

ヘルス Ⓜ 森田商店

大阪心齋橋筋南久太郎町北入

發賣元 Ⓜ 森田支店

大阪市中は支店に於て配達す ●遠國御注文は爲替にて大阪順慶町郵便局又は第三銀行へ振込あれ

明治廿五年九月十四日遞信省認可

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍